寄（より）遺跡・下小野遺跡

福岡県八女郡星野村所在遺跡の発掘調査報告書

星野村文化財調査報告書

第３集

２００９

星野村教育委員会

寄遺跡・下小野遺跡

星野村文化財調査報告書

第３集

２００９

星野村教育委員会

序

本書は、平成20年度、県営中山間地域農村活性化総合整備事業、新星野地区ほ場整備事業に先立ち、星野村教育委員会が実施いたしました寄遺跡・下小野遺跡の発掘調査報告書です。

寄遺跡は星野川右岸の標高約250mに位置する遺跡です。検出した遺構（いこう）は、堀立柱建物（ほったてばしらたてもの）２棟、土坑（どこう）２基など、中世を中心とした遺跡でした。土師器（はじき）、陶磁器、須恵器、木製品が出土しています。

下小野遺跡は、星野川左岸の標高約154m、星野村内で最も広く谷が開ける地点にあたり、良好な状態で遺構が展開されました。中世と縄文時代晩期の遺構が確認され、縄文土器、土師器、陶磁器、石器、石製品など多数の遺物が出土しました。

検出した遺構から、その時代の寄・下小野遺跡周辺の生活の営みなどが伺われます。

このように埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにするうえで欠かすことの出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、更には教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書刊行するにあたり福岡県教育委員会をはじめ、作業に携わっていただいた方々とその他多くの皆さまのご指導、ご協力に対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成21年12月28日

星野村教育委員会

教育長　栗　原　宏　徳

例　言

1．本書は、平成20年度に星野村教育委員会が福岡県筑後農林事務所から委託を受けて実施した、県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査記録で、星野村文化財調査報告書の第３集である。
2．発掘調査は星野村教育委員会が主体となり、福岡県教育庁総務部文化財保護課の援助を受けて実施した。
3．本書に掲載した遺跡は福岡県八女郡星野村大字寄に所在する寄遺跡および同下小野に所在する下小野遺跡である。
4．本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
5．寄遺跡出土の桶底板および下小野遺跡出土の炭化種子の分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
6．本書に掲載した遺構図は、調査担当者が実測し、栗秋恵二、栗秋悦子の協力を得た。
7．本書で使用した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づく座標北である。
8．出土遺物の整理・復元は濱田信也氏の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
9．出土遺物の実測は調査担当者、棚町陽子、橋之口雅子が行った。
10．遺構・遺物の製図は豊福弥生、原カヨ子が行った。
11．出土遺物・写真・図面はすべて、星野村教育委員会において保管している。
12．本書の執筆は調査担当者で分担し、編集は今井が行った。

本　文　目　次

図　版　目　次

挿　図　目　次

Ⅰ　はじめに

第１節　調査の経過

１　調査に至る経緯

平成17年10月24日、「県営中山間地域総合整備事業（新星野地区）」（平成18年度～平成23年度）に伴う工事対象地における埋蔵文化財の有無について、福岡県筑後農林事務所、星野村産業振興班、星野村教育委員会で協議を行い、ほ場整備工事に先行して試掘調査を行うこととした。

土穴地区（平成19年度）、寄地区及び下小野地区（以上平成20年度）の試掘調査結果をもとに、福岡県筑後農林事務所、福岡県文化財保護課、星野村建設産業課、星野村教育委員会で協議を行い、遺跡の存在が確認された箇所において発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成20年度、整理作業は平成21年度に行った。

調査期間：平成20年11月26日～平成21年２月19日

調査面積：寄遺跡　　1,732㎡

　　下小野遺跡　　810㎡

２　調査組織

星野村教育委員会	平成20年度		
	総括	教育長	栗原宏徳
	事務局	教育次長	角田恵一
		社会教育係長	向　智宏
		社会教育係	二田房一
	平成21年度		
	総括	教育長	栗原宏徳
	事務局	教育次長	原田英雄（10/1～）
		社会教育係長	向　智宏
		社会教育係	中津留千鶴子
福岡県教育委員会	文化財保護課	参事補佐	木下　修
		参事補佐	新原正典
		主任技師	今井涼子

発掘調査従事者　足立秀人、石川清次、石川直美、石橋智津子、石橋トヨミ
石橋頼雄、江頭文子、江頭美千代、江頭モモエ、倉住大八郎
栗秋岩光、栗秋悦子、栗秋恵二、栗秋佐久馬、栗秋信一
栗秋トシノ、栗秋玲子、佐伯輝子、佐伯正利、末﨑克信、鶴元博人
八田京子、原口悦子、原口博昭、原口昌子、樋口岳雄、樋口文子
藤﨑正昭、宮崎悦子、山口キヨエ、山口信一郎、山口末廣
山口尚樹

第２節　位置と環境

星野村は福岡県の南部八女郡の東部に位置している。北は耳納山地を境にうきは市と、東は熊渡山（960m）を背にして大分県日田市と、南は石割岳（940m）から高牟礼に連なる山で八女郡黒木町、同矢部村と接している。西は矢部川の支流星野川の流れに沿って比較的緩やかな地形となり、八女市を経て筑後平野へと開ける。

四方を山に囲まれた総面積81.28㎢の東西に長い山村で、星野川とその支流沿いに集落が点在し、道路も河川沿いに伸び、各集落を結んでいる。村域の約８割を山林が占め、耕地はわずかである。そのわずかな耕地は、谷地形の急斜面を切り開き、石を積んで土手を築き水田とした棚田である。この山深い村で暮らすための先人の努力の賜物である棚田は、四季折々の素晴らしい景観を見せている。また、茶の栽培も盛んで、特に玉露の「星野茶」として有名であり、品質は全国でも高水準を誇っている。

星野村に所在する遺跡はそれほど多くは知られておらず、昭和55（1980）年段階の遺跡分布地図によれば、神社や寺院を含めて22件がリストアップされているにすぎない。昭和57（1982）年に、花木園増設に伴い村としては初めての発掘調査が行われ、星野村文化財調査報告書第１集『大草平（おくさだいら）遺跡』が刊行された。大草平遺跡は先土器時代から縄文時代中期にわたる複合遺跡である。現在までに村内で確認された遺跡の中で最も古い遺跡の一つである。この時に村内の分布調査を再度行い、11件が追加されている。村内で採集された遺物は、先の調査報告書第１集に掲載されている。

平成２（1990）年に村指定史跡チンのウバ塚の発掘調査および遺跡整備、熊渡山（くまどやま）藩境石の確認調査が行われた。その後、平成５（1993）年に星野小学校建替えに伴う十籠星野小学校遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代晩期の集落跡が確認された。先のチンのウバ塚と熊渡山藩境石群の調査成果と併せて、星野村文化財調査報告書第２集『十籠星野小学校遺跡』にまとめられた。

平成10（1998）年、大字一木において製茶工場建設に伴う発掘調査が行われた。県道拡幅の際に石器等が採集され、その存在が知られることとなった一木（ひとつぎ）遺跡であるが、この遺物採集地点と発掘調査された一木遺跡とは県道を挟んで向い合う位置にある。一木遺跡もまた村内では最も古い遺跡の一つで、八女地域の歴史を考える上で重要なので、調査成果を後ほど紹介する。

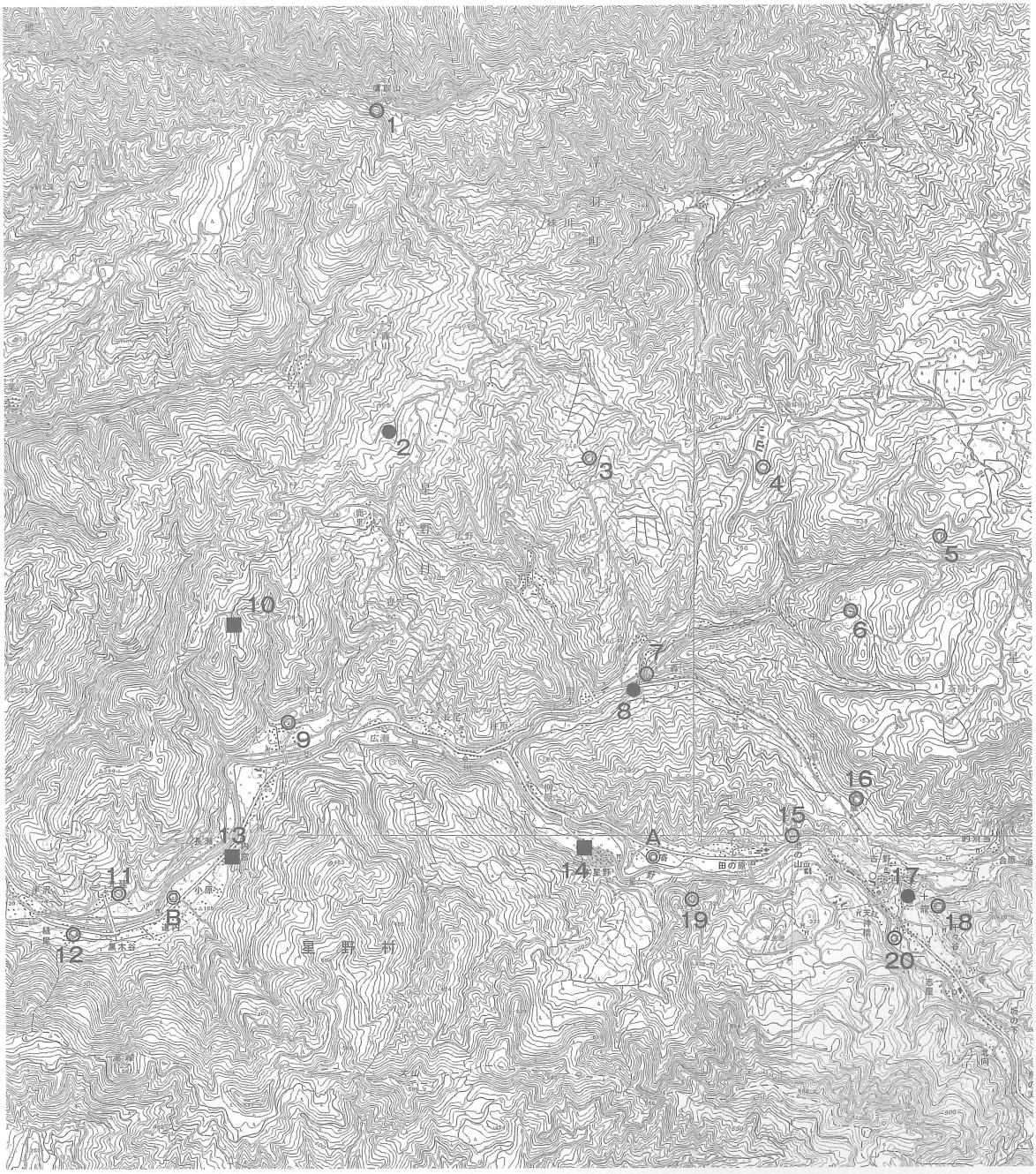
十籠星野小学校遺跡での弥生時代の甕の出土、村内での弥生土器の採集、村内出土と伝えられる中広銅矛の存在などはあるものの、弥生時代以後の状況は今もって詳しいことがわかっていない。

「星野」の名が歴史に登場するのは南北朝期になってからである。黒木氏の一族である星野氏が星野村本星野に館を構えていたといわれており、墓所とされる地がある。九州は南朝方が多くを占める地であったが、星野氏もまた南朝方であり、征西将軍宮懐良親王にまつわる伝承が多く残る。その御墓所が大切に祭られているが、この時期の明確な遺構はまだ確認されておらず、詳しい状況は依然わかっていない。

江戸時代、生葉郡星野村は久留米藩に属した。村は幕府直轄領と接しており、熊渡山藩境石によって境界が示された。

明治22（1889）年に町制施行により生葉郡星野村が誕生、同29（1896）年八女郡に編入された。

来る平成22（2010）年２月に八女市と合併し、村としての歴史を閉じる。しかし、「星野村」に対する村民の思いは深く、合併後の住居表示は「八女市星野村」とされると聞いている。



凡例　◎ 今回報告の遺跡　○ 遺物が採集された遺跡
● 調査済みの遺跡　■ その他の遺跡等

A．寄遺跡　B．下小野遺跡
1．鷹取城跡　2．大草平（おくさだいら）遺跡　3．センドンダラ遺跡　4．大瀬耳納遺跡
5．炭床遺跡　6．山神遺跡　7．一木遺跡（採取地点）　8．一木遺跡（調査地点）
9．岩野遺跡　10．懐良親王御墓所　11．光延遺跡　12．縫尾遺跡
13．小野神社　14．星野氏墓所　15．こうもり岩洞穴　16．宮蔵遺跡
17．十籠星野小学校遺跡　18．千々谷遺跡　19．妙見城跡　20．チンのウバ塚

第１図　周辺遺跡分布図

一木遺跡（ひとつぎいせき）

一木遺跡は、八女郡星野村大字一木8137-1他に所在する。製茶工場建設に伴い、平成10年１月20日から同年２月９日にかけて星野村教育委員会が調査主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所から調査担当職員の派遣を受けて発掘調査を行った。調査面積は、約900㎡である。

遺跡は星野川の支流である広内川と轟川に挟まれた丘陵部（標高230m）に立地する。現状では、棚田として水稲耕作が行われており、平成９年度に実施した確認調査の結果、縄文土器・石器を含む包含層が確認され、工事着手前に発掘調査を行うこととなった。

検出された遺構には、縄文時代早期の屋外炉跡２基、土坑５基、ピット、包含層等がある。包含層は調査区の３ヶ所で確認され、楕円押型文土器の他に石鏃・石匙・石錐・石斧等が出土した。

検出遺構（第２図）

１号炉跡　調査区上段の東端部に位置する。長軸92cm×短軸81cmの円形を呈するが、深さは８cmと著しい削平を受ける。底面及び周壁は火熱により赤変している。埋土中からは楕円押型文土器片、黒曜石剥片が出土した。

２号炉跡　調査区上段の中央部に位置し、溝状遺構に南半部を切られる。東西長51cm、南北長は35cmの遺存状況。埋土には炭化物を多く含み、焼土もみられた。

１号土坑　１号炉跡の１m西側に位置する。長軸88cm×短軸74cm、深さ16cmの隅丸方形を呈する。埋土は黒褐色土で、楕円押型文土器片、黒曜石剥片等が出土している。

２号土坑　１号土坑の西側に近接して位置する。長軸154cm×短軸112cmの隅丸長方形を呈する比較的大きめの土坑であるが、深さは10cmと著しい削平を受ける。底面中央に扁平な安山岩が置かれていた。埋土からは、石器片が出土している。

３号土坑　２号土坑の西側に近接して位置する。長軸89cm×短軸60cm、深さ９cmの楕円形を呈する。埋土中からは石器剥片が１点出土したのみであった。

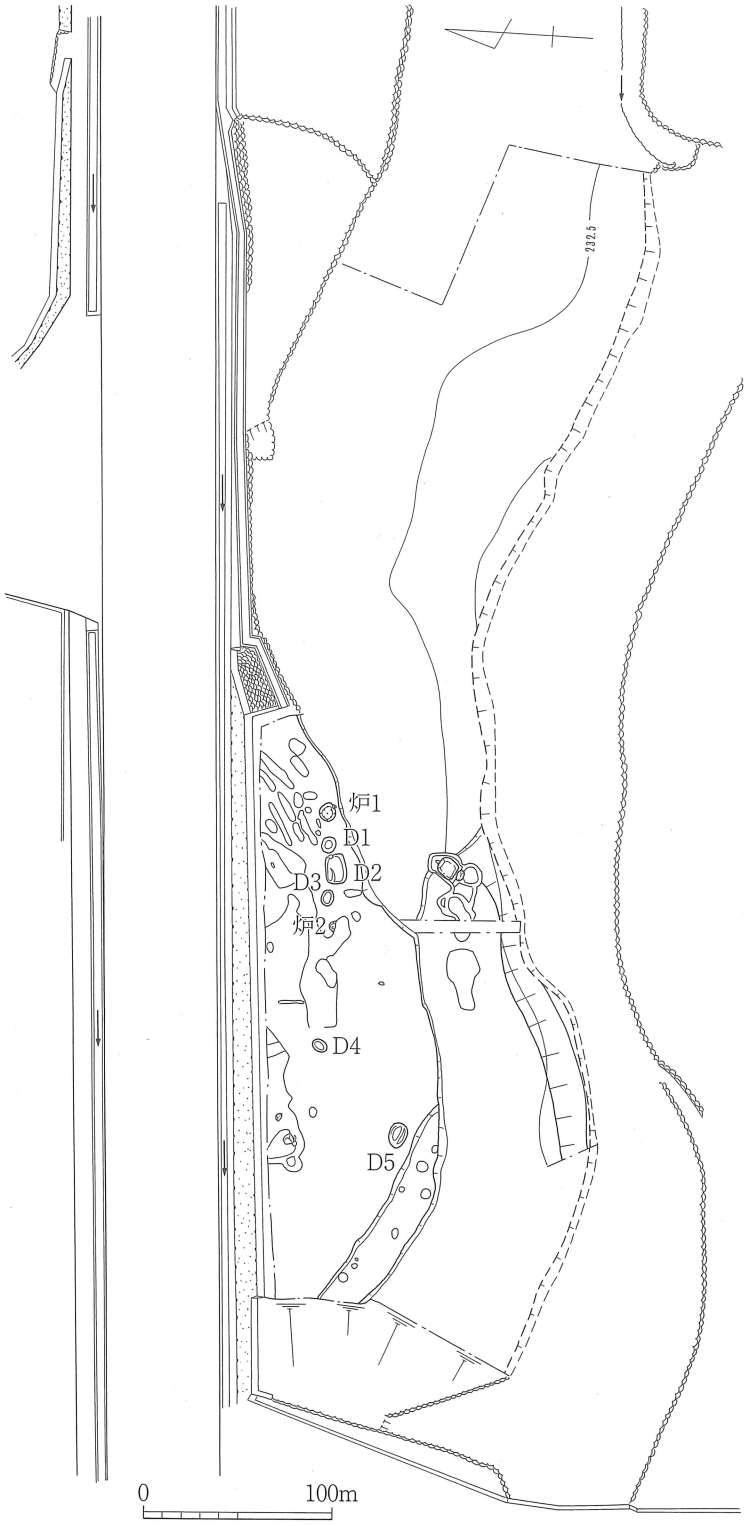
４号土坑　調査区上段のやや西寄りで検出した。長軸90cm×短軸64cm、深さ17cmの楕円形を呈する。埋土は他の土坑同様、黒褐色土であるが、遺物の出土はなかった。

５号土坑　調査区上段の南西側で検出した。長軸128cm×短軸90cmの楕円形を呈し、二段に掘り込まれている。底面までの深さは30cmを測る。埋土中からは、晩期の土器片、石器片が出土した。

出土土器（第４図）

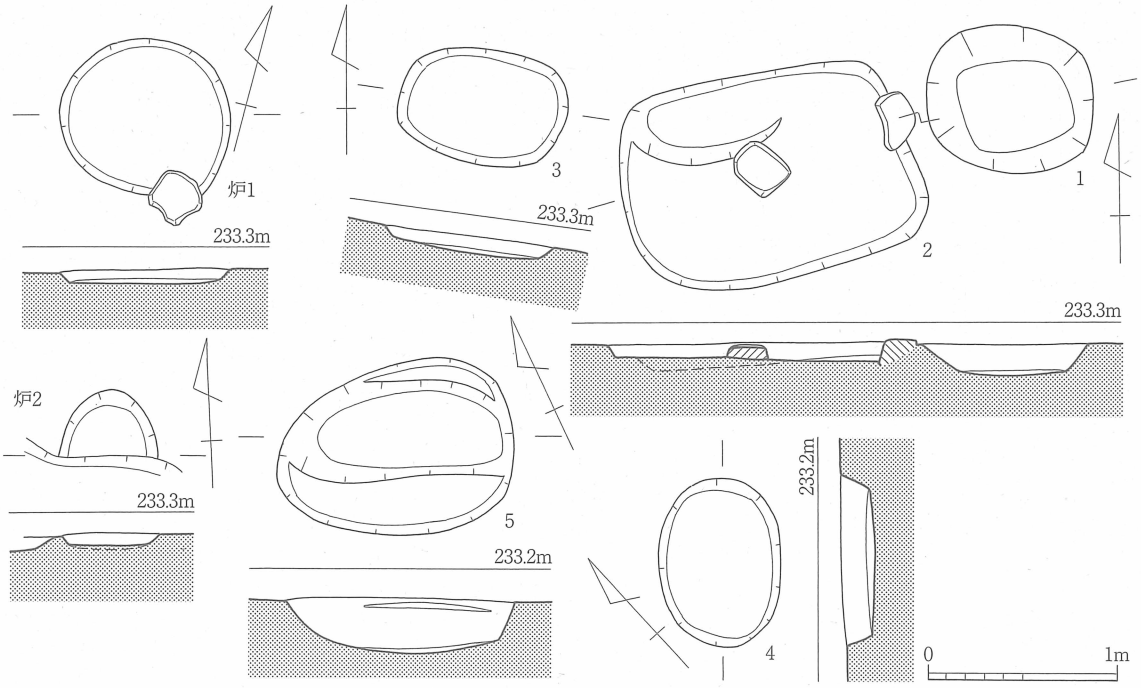
１～４は楕円押型文土器片で、１・２が口縁部、３は胴部、４は尖底の底部片。１の口縁端部は指頭痕により山形を呈する。５は鉢の口縁部片で、口径は14.4cmに復原した。外面ナデ、内面は工具による擦過痕がみられる。６・７は鉢の底部片で、共に外面条痕、内面擦過による。８は鉢の口縁部破片で、復原口径27.6cm。口縁部外面に２条の沈線を施す。

調査区全景

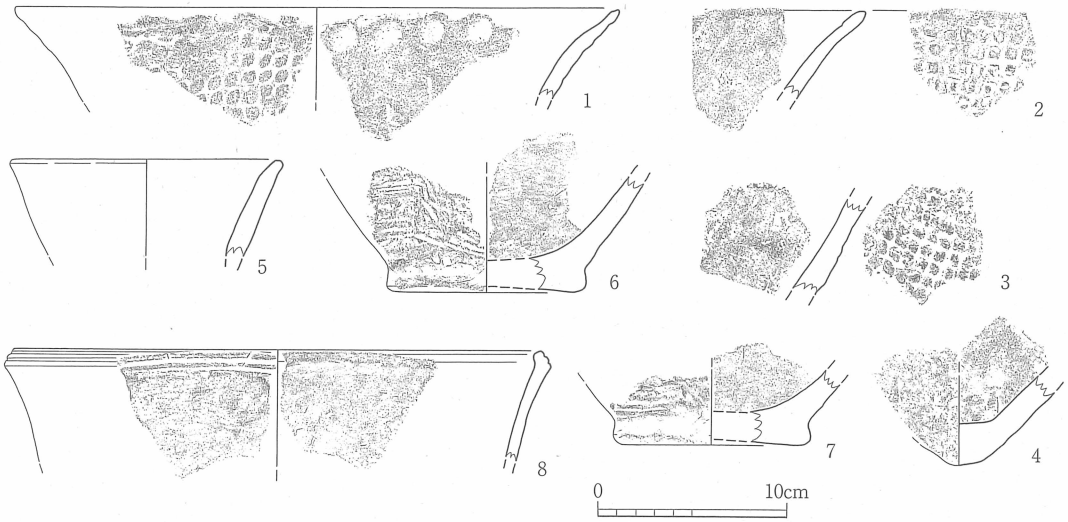


第２図　一木遺跡　遺構配置図（1/4,000）

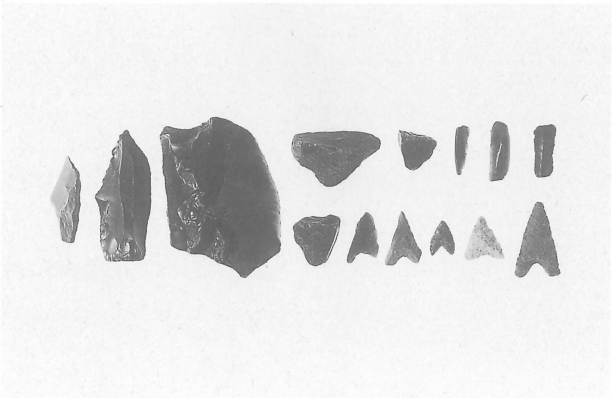
一木遺跡自体は、昭和52年の県道八女香春線拡幅工事の際に発見された。その際、旧石器及び押型文土器等100点余りが採集され、川原石を用いた舟形の石室も確認されたという。採集品には、尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・細石刃・削器・石鏃・石錐等の石器類及び楕円押型文土器・撚糸文土器・無文土器がある。今回の調査でも、ナイフ形石器・細石刃核・細石刃・削器・石鏃・石錐・凹石等及び縄文時代早期の楕円押型文土器・無文土器、晩期の精製土等が出土しており、星野村の遺跡の中でも古い時代に属する遺跡として注目される。



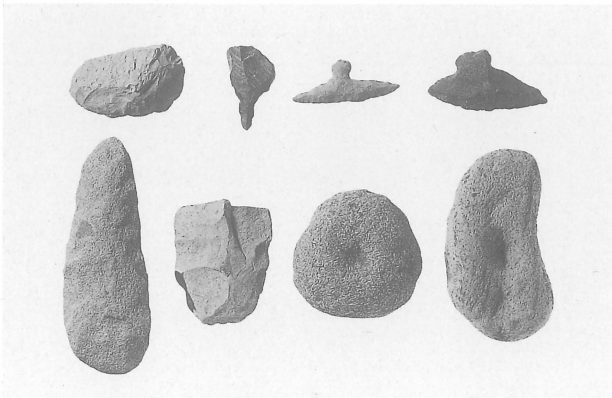
第３図　一木遺跡　１・２号炉跡、１～５号土坑実測図（1/40）



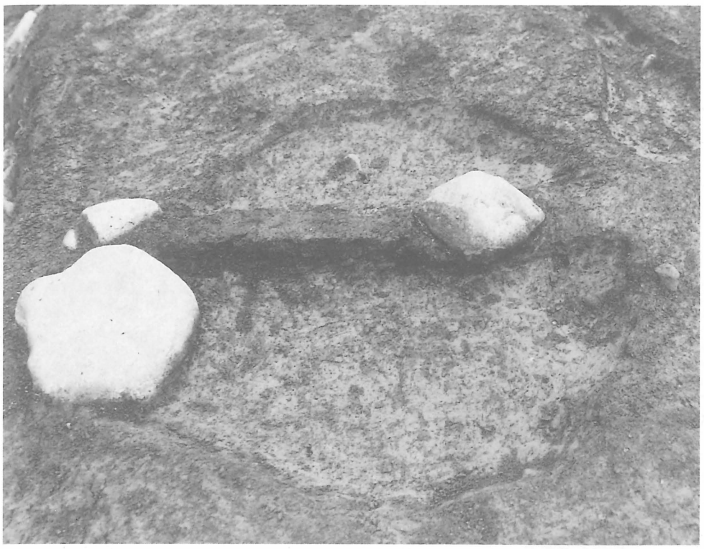
第４図　一木遺跡　縄文土器実測図（1/4）



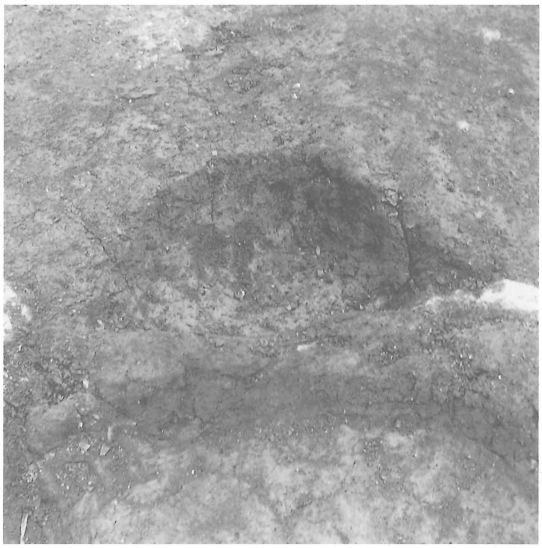
出土石器１



出土石器２

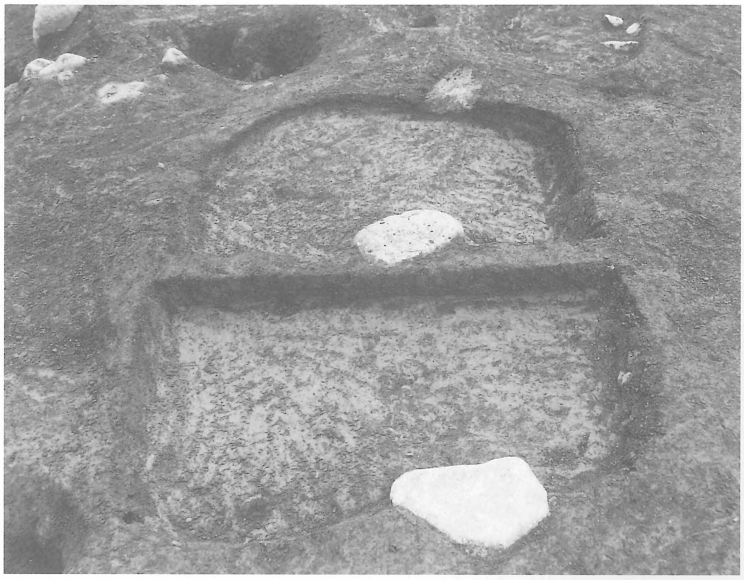


1号炉跡（東から）



2号炉跡（西から）

1号土坑（東から）



2号土坑（東から）

3号土坑（東から）

4号土坑（北東から）

5号土坑（南東から）

Ⅱ　発掘調査の記録

第１節　寄遺跡

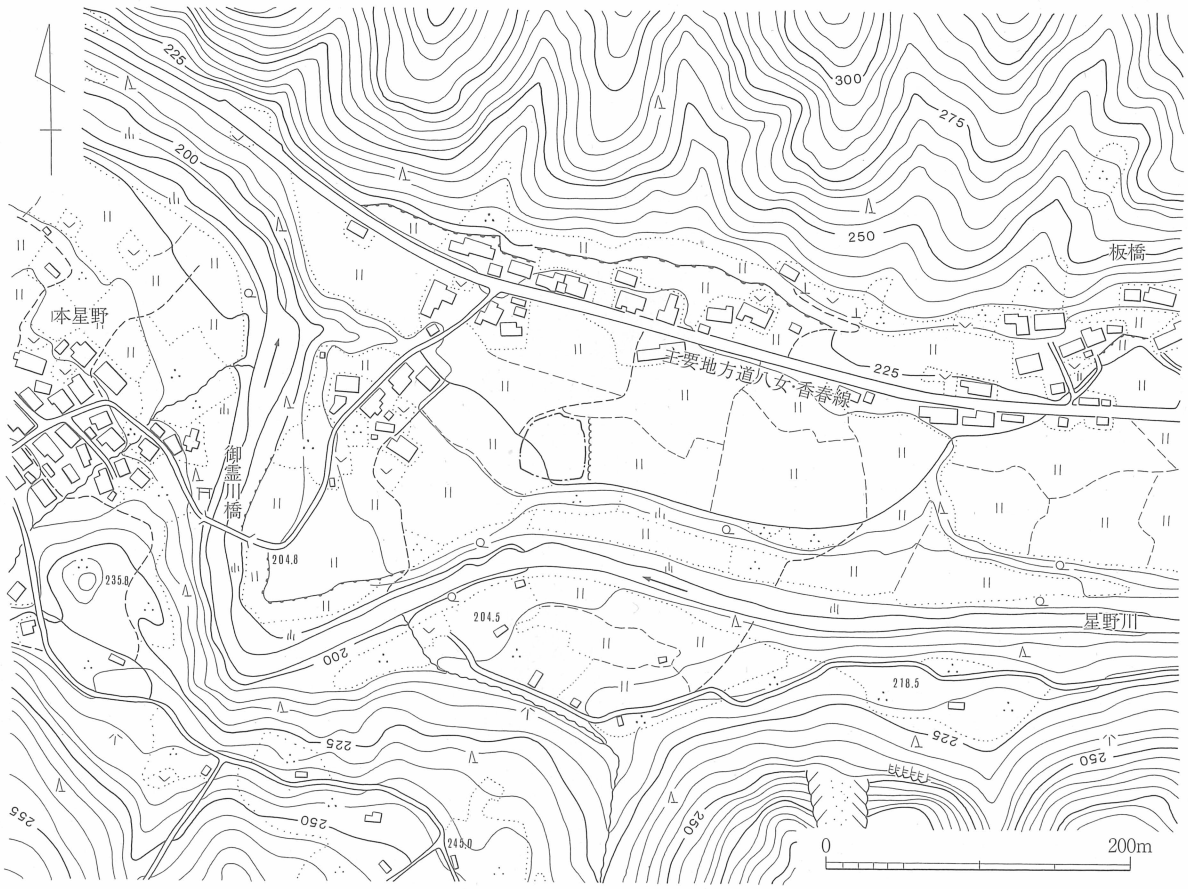
１　遺跡の概要

寄遺跡は、星野川右岸の斜面上に位置する。標高は214m前後である。調査対象地1732.5㎡の中央北寄りに、北西―南東方向の法面が走り、北半と南半で約１ｍの比高差がある。北側の高い部分を上段、南側を下段として遺物を取り上げた。

土壌は、星野川の堆積作用により形成されたと思われる円礫と砂の互層が基本だが、下段は黄褐色粘質土、灰褐色粘質土の堆積が認められる。法面部分には遺物を含む黒褐色土が堆積していた。

本遺跡では、掘立柱建物跡２棟、土坑２基のほか、井戸跡２基、不明遺構、多数のピットを検出した。ピットは上段から法面にかけて比較的多く分布している。下段は、上段に比べまばらである。下段西側は砂礫混じりの青灰色粘質土が堆積しており、谷状になると思われる。上段北東隅には遺構の広がりが見られない。

出土した遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、磁器、土製品である。ピットからの遺物の出土は少なく、黒褐色土中からの出土は比較的多かったが、小片がほとんどで図示できるものは少ない。



第５図　寄遺跡　周辺地形図（1/5,000）

第６図　寄遺跡　遺構配置図（1/300）

2　遺構・遺物

各遺構とその出土遺物について順にみていく。土製品については後でまとめて述べる。

1号掘立柱建物跡（図版2、第7図）

調査区の上段東寄りに位置する。2間×2間だが、北側、南側の柱列の柱間は、東側が狭く西側が広くなっている。東側柱列は柱筋が通り、柱穴の深さも0.3m前後としっかりしいて、掘立柱の柱穴と見て間違いないだろう。埋土も黒褐色土で共通していた。しかし、周辺のピット群の中には、同規模かつ柱筋が通るピットはない。検討を重ね、建物としてこのような形を想定してみた。

東側柱列の南方向延長上に、規模、埋土が共通するピットが1基ある。やや柱間が広くなるが、このピットを含めた柵列の可能性もある。

図示した土師器杯（第11図1）の他に、白磁椀小片が出土した。

出土遺物（図版5、第11図1）

柱穴4から出土した土師器杯片である。内外面とも横ナデで、底部は糸切り未調整。内面にススの付着が見られる。灯明皿として使用されたのであろう。胎土は精良で焼成もよい。復元底径5.0cm。

2号掘立柱建物跡（図版2、第7図）

調査区の上段中央付近に位置する。1間×2間の東西棟。柱穴はいずれも、深さが0.4m前後を測る。柱穴2と4の底面には、平らな石が据えられている。

出土遺物はない。

1号土坑（図版2、第8図）

調査区の上段北端に位置する。調査区外へ伸び、全形は不明。長軸4.27m、幅は広い部分で1.65m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は黒褐色土で、少量だが、遺物が出土した。

出土遺物（図版5、第11図2）

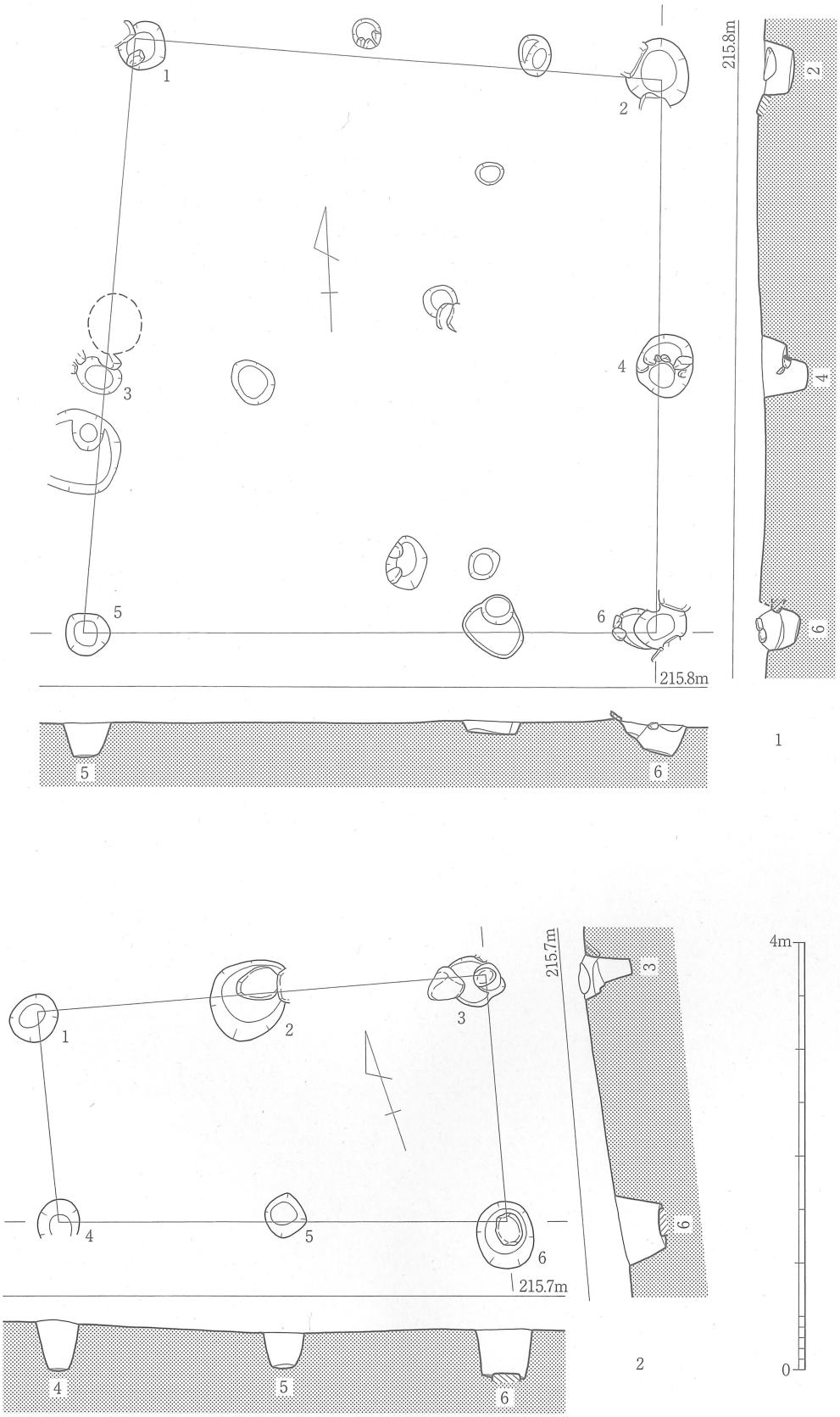
土師器杯片である。内外面とも横ナデ、底部は糸切り未調整。胎土は精良、焼成もよい。復元口径11.0cm、器高3.6cm、復元底径5.4cm。

2号土坑（図版3、第8図）

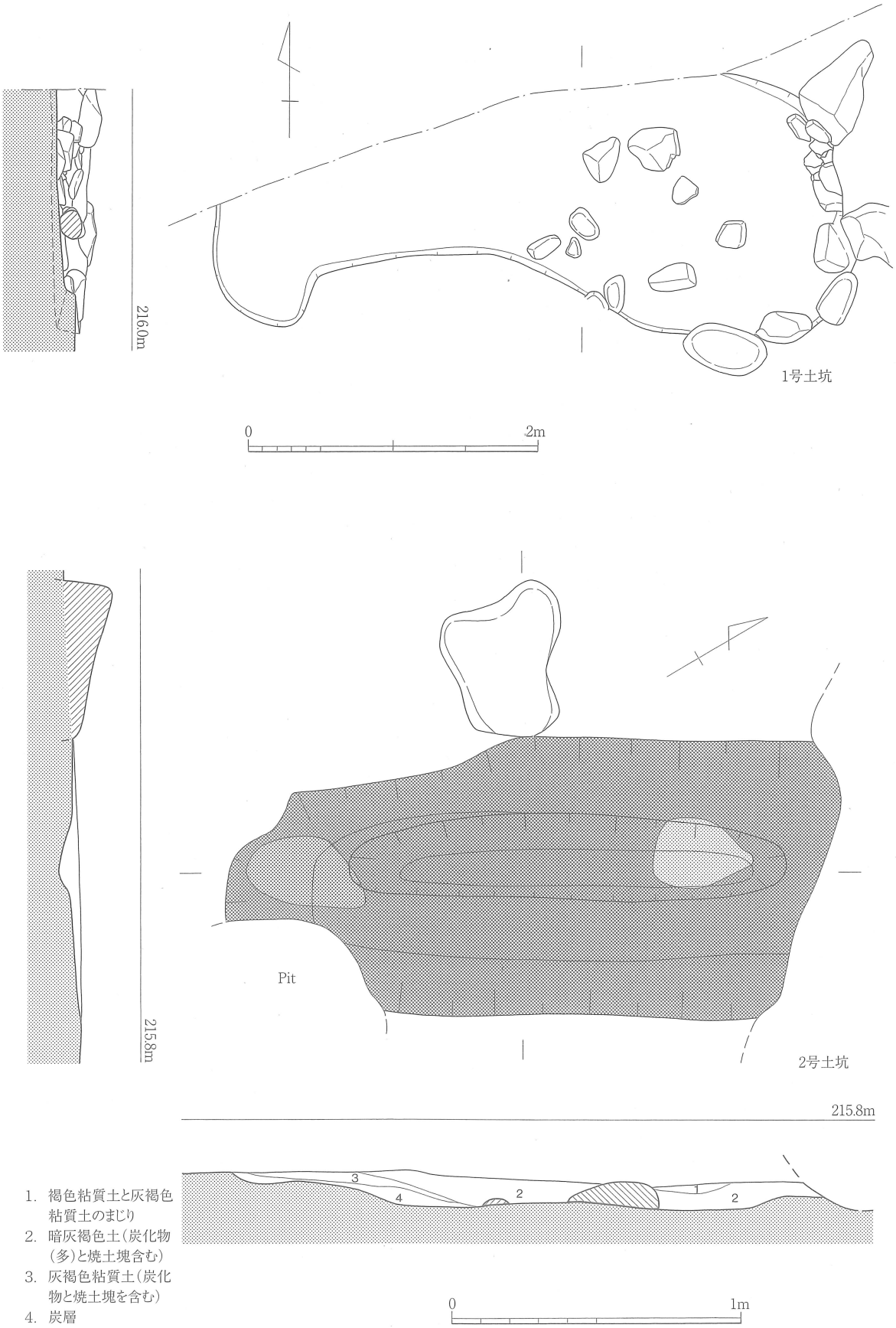
調査区の上段東寄りに位置する。検出時にはほぼ方形に炭化物の広がりが認められた。北側に一部焼土が、南側の一部に灰がのぞいていた。長辺2.0m、短辺0.95mの長方形で、中央部分が細長い楕円状に深くなっている。深さは最深部で0.12mを測る。

堆積土中に灰や炭化物、焼土、礫を含む。壁面や床面は焼け締まっておらず、地山に含まれる石にも被熱の痕跡が認められない。また、土層の状況から、この場所で火を使用したのは、一度きりで、その後軽く土がかぶせられた程度ではないかと思われる。

管状土錘（第12図4）が出土した。



第７図　寄遺跡　１・２号掘立柱建物跡実測図（1/60）



1. 褐色粘質土と灰褐色粘質土のまじり
2. 暗灰褐色土（炭化物（多）と焼土塊含む）
3. 灰褐色粘質土（炭化物と焼土塊を含む）
4. 炭層

第８図　寄遺跡　１・２号土坑実測図（１は1/40、２は1/20）

１号井戸跡（図版３、第９図）

下段中央付近に位置する。直径1.3m、深さ0.93mを測る。底面は砂礫層で、現在でも豊富に湧水する。井戸枠等の痕跡は認められなかった。

遺物は出土していないが、埋土の状況から近代以降と思われる。

２号井戸跡（図版４、第９図）

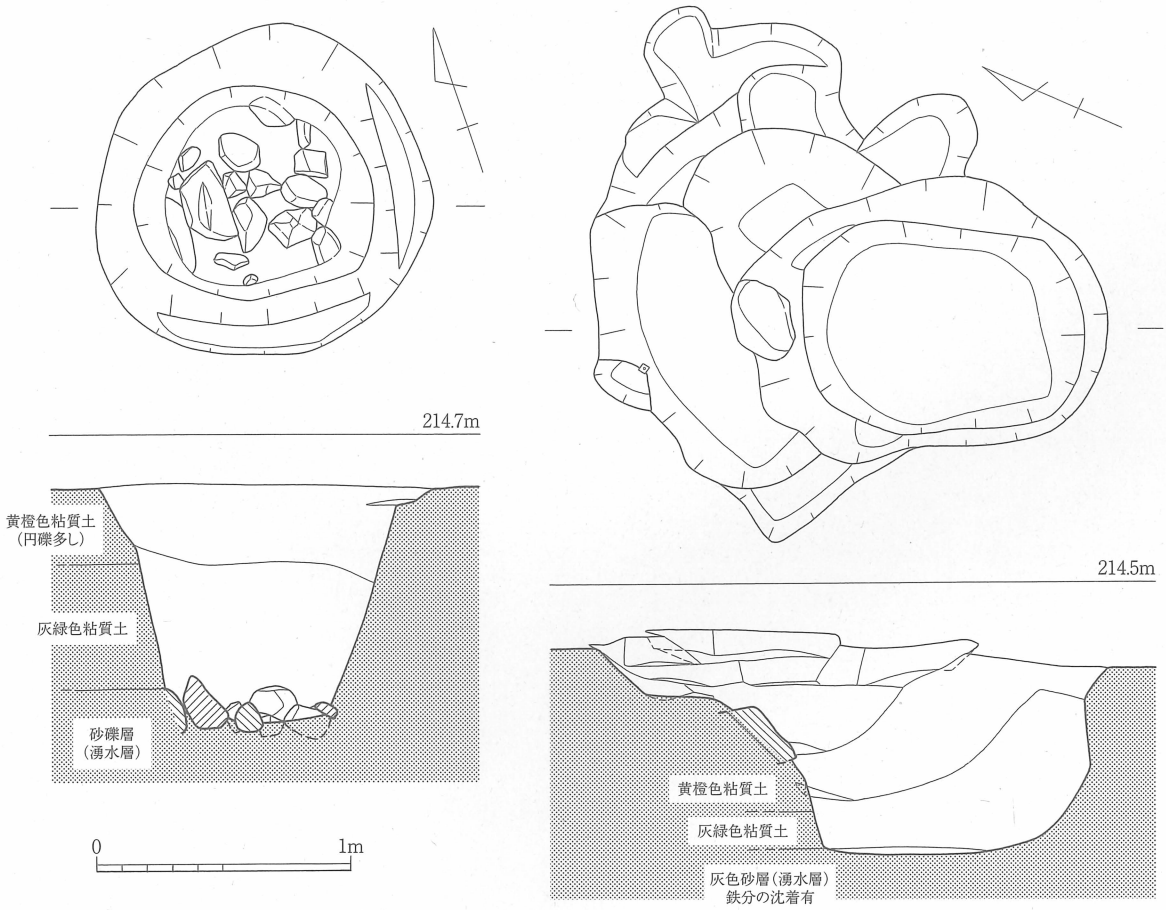
下段中央付近に位置する。長辺1.46m、短辺1.05mの隅丸方形。断面にかかっている石に打ち欠いた痕跡があるので、ここまでが本来の井戸であろう。北側は撹乱されている。深さは0.76mを測る。１号井戸跡と同じ層に達し、豊富に湧水する。井戸枠等の痕跡は認められない。

遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近代以降と思われる。

不明遺構（図版４、第10図）

下段中央に位置する。直径2.0mの桶の底部である。検出時は灰色粘質土が確認され、井戸と思われたが、埋土を除去すると桶の底部が現れた。地山を掘りくぼめた中に桶を直接置き、隙間に礫と粘土を詰めて固定している。桶の底板と側板はスギ材である。（P18科学分析結果参照）

東側の側板の一部に、直径約４cmの穴が約10cm間隔で３ヶ所穿たれているのが確認できた。桶の用途と関係すると思われるが、目的は不明。



第９図　寄遺跡　１・２号井戸跡実測図（1/30）

周辺には覆い屋のような施設は確認できず、屋外にあったと思われる。
桶部材は、底板はアルファベットを付けて、側板は▲から順に番号を付けて取り上げた。
土器類は出土していないが、掘方と桶の間の埋土の状況から井戸跡と同時期の遺構であろう。

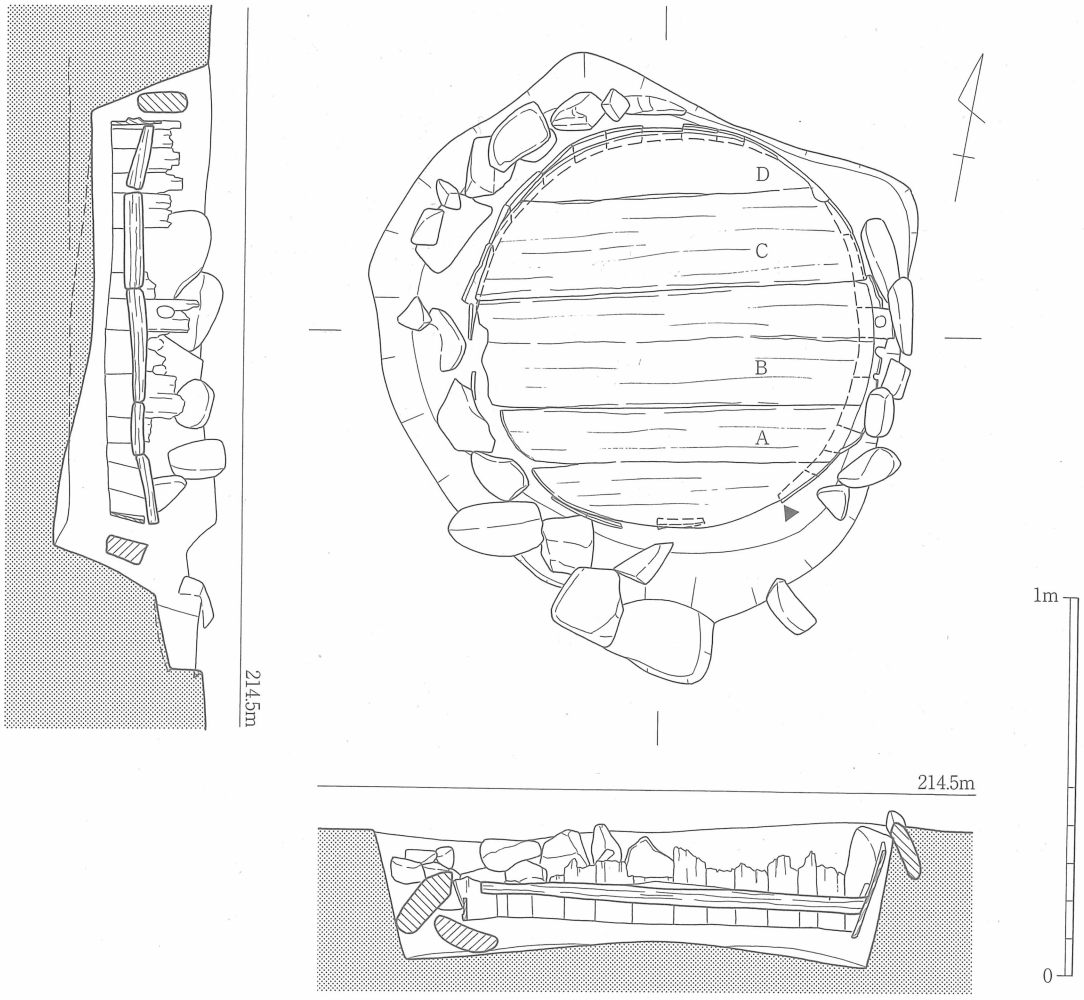
13号ピット（図版４）

他のピットと様相が異なるので報告しておく。下段中央付近、１号井戸跡の北に位置し、長辺1.4m、短辺0.95mの長方形を呈する。深さは0.1mで、断面は皿状。底面に小さな円礫を敷き詰めている。糸切り底の土師器杯小片と管状土錘（第12図６）が出土した。

ピット出土土器（図版５、第11図３・４）

３は土師器の甕の口縁部片である。外反する口縁の端部は丸くおさめている。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は粗いハケ目、内面はヘラ削り。復元口径23.0cm。Ｐ16出土。

４は白磁小杯の底部片。回転ヘラ削り整形で、内外面とも施釉する。高台部は露胎だが、釉の垂れが見られる。胎土は白色でやや粗く、釉は明るい淡青色を呈する。復元高台径4.7cm。Ｐ36出土。



第10図　寄遺跡　不明遺構実測図（1/20）

包含層出土土器（図版５、第11図５～26）

５・６は須恵器の杯の口縁部片である。どちらも、内外面とも横ナデ調整で、小片のため口径は不明。６の外面に薄く灰が被っている。斜面部東側で出土した。

７～11は土師器の杯である。7は内外面とも横ナデ調整で、底部は糸切り未調整。外面の一部が被熱し赤変。復元口径7.8cm、器高2.2cm、復元底径4.8cm。８もまた、内外面とも横ナデ調整で、底部は糸切り未調整。復元口径11.2cm、器高3.0cm、復元底径3.8cm。９～11はいずれも、口縁部小片で口径は不明。内外面とも横ナデ調整で、胎土は精良で焼成もよい。10の内面にススが付着している。

12～19は土師器の甕である。12～14は口縁部小片で口径は不明。内外面とも横ナデ調整する。13のみわずかに体部が残り、外面はハケ目調整、内面はヘラ削り調整である。15～17は小型の甕である。15と17は、口縁部内外面、体部外面を横ナデ調整、内面を底部から口縁方向へヘラ削り調整。16は体部外面を粗いハケ目調整、体部内面は口縁に沿ってヘラ削りしている。復元口径は、15が15.0cm、16が16.0cm、17が17.0cm。18・19は大きく外反する口縁を持つ大型の甕である。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は粗いハケ目、内面はヘラ削り。復元口径は、18が24.0cm、19が30.0cm。

20は短く外反する口縁を持つ土師質の壺である。口縁端部は欠けているが、やや摘み上げるように仕上げると思われる。内外面とも荒れていて調整は不明瞭だが、ごくわずかに内面に当て具痕が残る。胎土は精良。焼成に失敗したものか。

21～23は黒色土器である。21は椀であろうか。内面は単位が不明瞭だがミガキ調整、外面は横ナデ調整。小片のため口径不明。22は杯の底部片。器面が荒れていて不明瞭だが、高台が付いていた可能性が高い。内面のみ炭素吸着し、ミガキ調整。復元底径6.4cm。23は高台付杯の底部片で、高台がはがれている。内面のみ炭素吸着し、ミガキ調整。外面は器面が荒れていて調整不明。復元底径5.5cm。いずれも胎土は精良である。21の外面は褐色、22と23の外面は橙褐色を呈している。

24は白磁椀の口縁部小片。口縁端部を丸くおさめ、内外面とも文様はない。胎土は精良で淡灰色、釉も灰色を呈する。25は青磁椀。口縁部下に雷文を配し、体部にも文様を施す。胎土は灰色、釉は灰緑色を呈する。釉のかかりは比較的厚い。復元口径13.4cm。

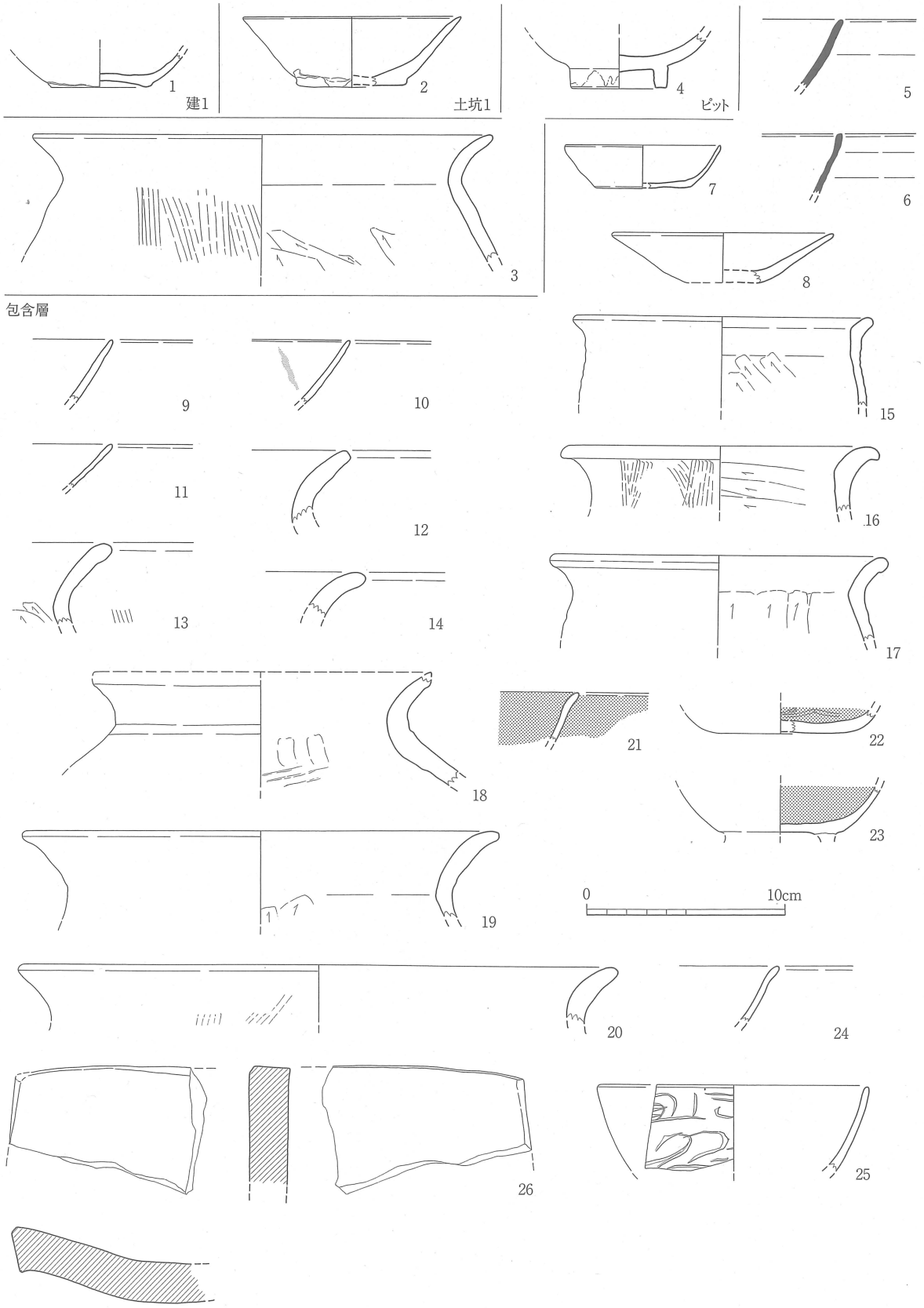
26は一枚作りの平瓦片である。凹面、凸面とも板状のものでナデ仕上げしていて、叩き具の痕跡は認められない。端面は、凸面側を軽く面取りするほかは、特に調整していない。側面はヘラ切り後、凹面側を面取りしている。胎土には砂粒をあまり含まず、灰黄褐色に焼き上がっている。下段から出土した。

土製品（図版５、第12図）

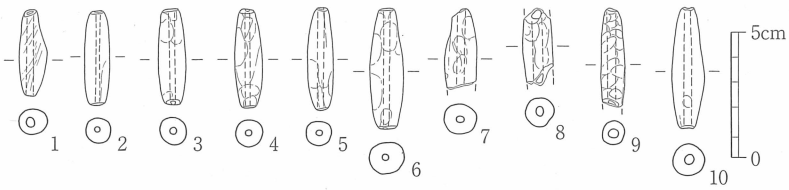
管状土錘が10点出土している。

孔径が1.5～2.0mmと小さく、両端を面取りしているもの（１～６）と、孔径が3.0mm以上で面取りをしないもの（７～10）とがある。計測値を第１表にまとめた。

他に目に付く特徴を述べる。１は表面をミガキ仕上げしている。６は化粧土を施し、表面を赤く仕上げている。９は本体の径に対して孔径が大きく、黒褐色に焼成していて、他の個体とは様相が異なる。



第11図　寄遺跡　出土土器・陶磁器・瓦実測図（1/3）



第12図　寄遺跡　出土土製品実測図（1/3）

遺物番号	器種	大きさ（cm）			重さ（g）	出土地点	備考
		長さ	最大径	孔径			
1	土錘	3.35	1.05	0.28	3.50	P44	完形、両端部面取
2	土錘	3.70	1.00	0.15	4.30	P28	完形、両端部面取
3	土錘	3.75	1.25	0.20	5.60	斜面中央付近	完形、両端部面取
4	土錘	3.85	1.10	0.18	4.40	２号土坑付近	完形、両端部面取
5	土錘	4.00	1.03	0.25	4.05	２号土坑	完形、両端部面取
6	土錘	4.70	1.42	0.20	7.90	P13	完形、両端部面取
7	土錘	3.08＋α	1.30	0.30	5.2＋α	斜面中央付近	
8	土錘	2.95＋α	1.20	0.40	3.8＋α	斜面中央付近	
9	土錘	3.85	1.00	0.35	3.95	斜面東側遺構検出時	完形
10	土錘	4.75	1.32	0.35	6.80	斜面東側遺構検出時	完形

第１表　寄遺跡出土土製品計測表

３　小　結

寄遺跡は星野川の右岸に位置し、対岸の山上には妙見城跡がある。試掘調査の段階から縄文土器は確認されておらず、妙見城跡との関連から中世の遺構の存在が推測された。

調査区は上下２段になっており、下段は新しい時期の遺構、遺物が多い。１・２号井戸跡、不明遺構は遺物が出土しておらず正確な時期は不明だが、埋土の状況等からいずれも近世以降と思われる。北東―南西方向の溝状遺構があるが、これは畦道に伴うものである。

調査区上段には１・２号掘立柱建物跡、１・２号土坑がある。少ないながらも出土した遺物を見ると、同時期の遺構と考えてよいだろう。掘立柱建物跡の埋土と共通する、斜面に堆積していた黒褐色土中から須恵器、黒色土器も出土しているが、磁器はやや新しい特徴を備えており、13世紀頃と考えている。

斜面の裾部に位置する13号ピットは、方形を呈し、底面に小礫を敷き詰めるなど、他のピットとは様相が異なる。土師器杯、管状土錘が出土しているため、上段にある遺構と同時期であろう。

掘立柱建物跡の性格ははっきりせず、妙見城跡との関連も定かではない。しかしながら、これまで村内に伝わる中世の遺跡は遺構が確認されてはおらず、分布調査で採集された遺物も縄文時代のものがほとんであることを考えると、星野氏や征西将軍と関連する時期の遺構が確認できたことは意義深い。

星野村寄遺跡出土木材の樹種同定

株式会社古環境研究所

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、寄遺跡より出土した大樽の底板と考えられる加工木１点である。

3．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目と同義)、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

試料は、スギ　Cryptomeria japonica D.Don　であった。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に1～3個で、2個存在するものが多い。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

5．所見

同定の結果、寄遺跡の木材はスギであった。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。温帯に広く分布し、特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する針葉樹である。当時、遺跡周辺に生育、もしくは地域的な流通の範囲でもたらされたと推定される。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成,植生史研究特別第１号,植生史研究会，p.242

第２節　下小野遺跡

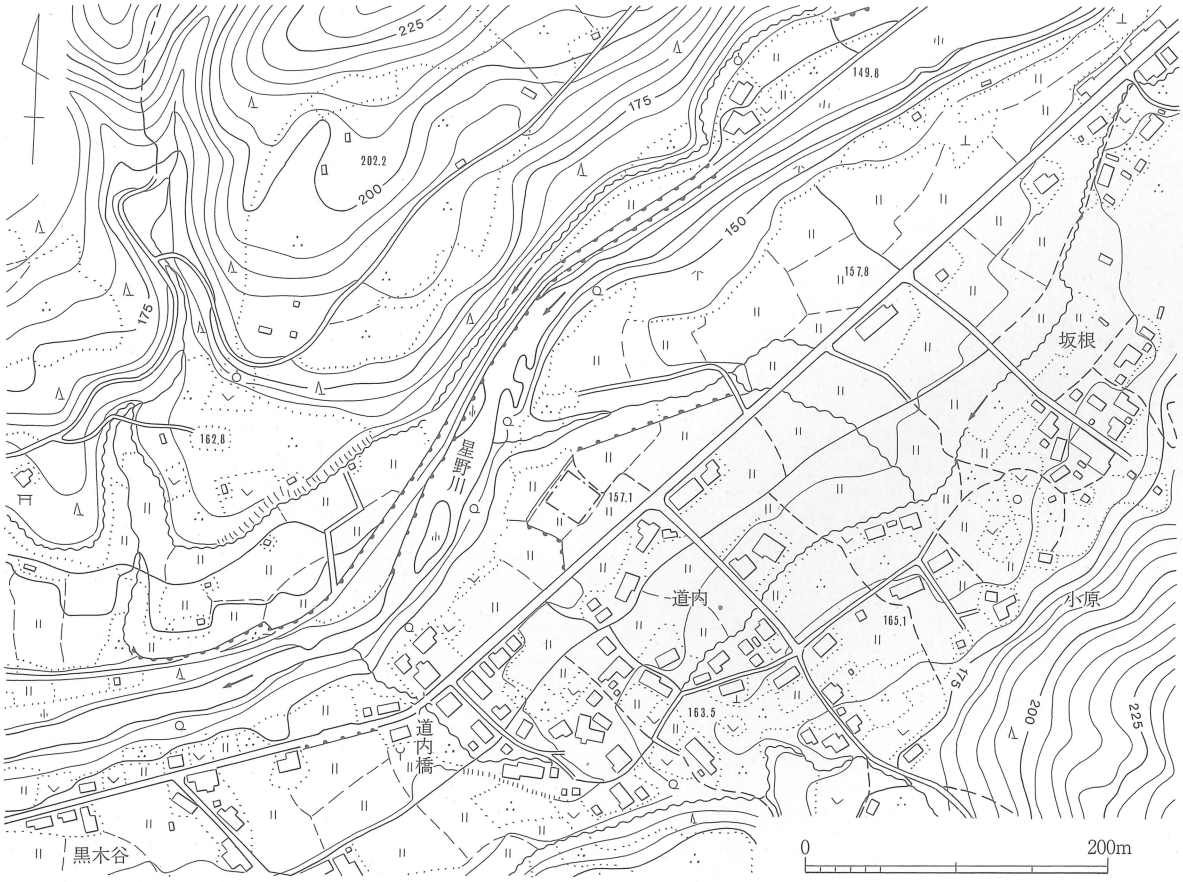
１　遺跡の概要

下小野遺跡は、星野川左岸の斜面上に位置する。星野川が形成した谷筋の平坦地が最も広い部分にあたり、標高は154m前後である。調査対象地810㎡と北西側の水田とは大きく差があるため、調査区北西側に地形の落ちが確認されると予想していたが、調査区いっぱいに遺構が検出された。

表土、耕作土の下層に暗褐色土、黄褐色粘質土（礫を含む）、暗赤褐色粘質土（礫を含む）の堆積が認められ、黄褐色粘質土（第15図５層）上面、暗赤褐色粘質土（同図６層）上面で、遺構が検出された。暗赤褐色粘質土の下は黄褐色土層だが、この黄褐色土は調査区東側および南側に厚く堆積している。北西に向かって薄くなり、調査区北西隅では堆積が認められない。

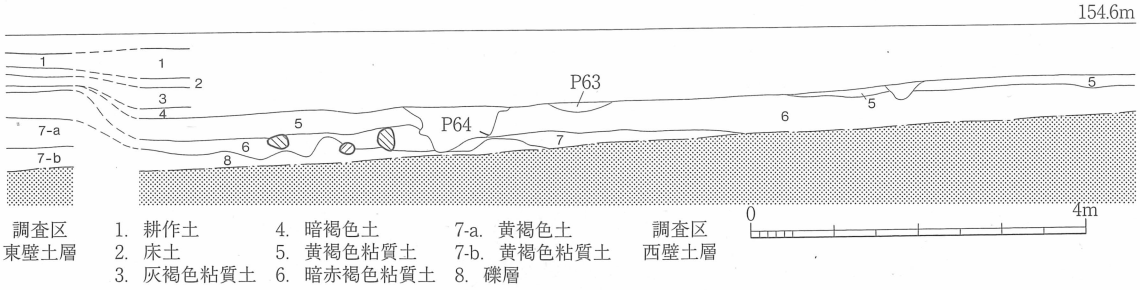
黄褐色粘質土（５層）上面で検出した遺構を上層遺構、暗赤褐色粘質土（６層）上面で検出した遺構を下層遺構として、遺構配置図（第14図）を作成した。上層では、中世と縄文時代の遺構が確認され、溝１条、ピット多数、風倒木痕を検出した。下層では土坑４基、埋甕１基、不明遺構、ピット多数を検出した。５層および６層は遺物を包含しており、遺物の取り上げの際には、調査区をグリッド状に区分けし、出土区を示した。取り上げた遺物のうち、本書中に掲載した遺物の出土地点は第14図に示している。

出土した遺物は、縄文土器、陶磁器、土製品、石器、石製品、炭化種実である。



第13図　下小野遺跡　周辺地形図（1/5,000）

第14図　下小野遺跡　遺構配置図（1/300）



第15図　下小野遺跡　土層図（1/90）

2　遺構・遺物

各遺構とその出土遺物について、上層遺構、下層遺構の順でみていく。土製品および石器、石製品についてはそれぞれ土器の後でまとめて述べる。

上層遺構

1号溝（第14図）

調査区の北壁付近に位置する。調査区外に伸び、全長は不明。ごく浅い溝で、最深部で0.2mを測る。埋土は砂礫混じりの暗褐色土である。他の遺構の状況と考え合わせると、近代以降の遺構と思われる。土器のほかに管状土錘（第18図５）、凹み石（第34図116・118）が出土した。

出土遺物（図版10、第16図１～４）

縄文土器が出土しているが、下層遺構からの混じりこみである。

１・２はどちらも精製浅鉢の口縁部である。長く外反する口縁で、端部はやや摘みあげるように仕上げる。いずれも小片で口径不明。１は口縁端部外面に浅い１条の沈線を巡らし、焼成後に穿孔している。３は深鉢の口縁部で、口縁下で屈曲する。口縁部外面に沈線はなく、また、内外面ともミガキの痕跡はない。小片のため口径不明。４は深鉢の底部片である。復元底径12.2cm。

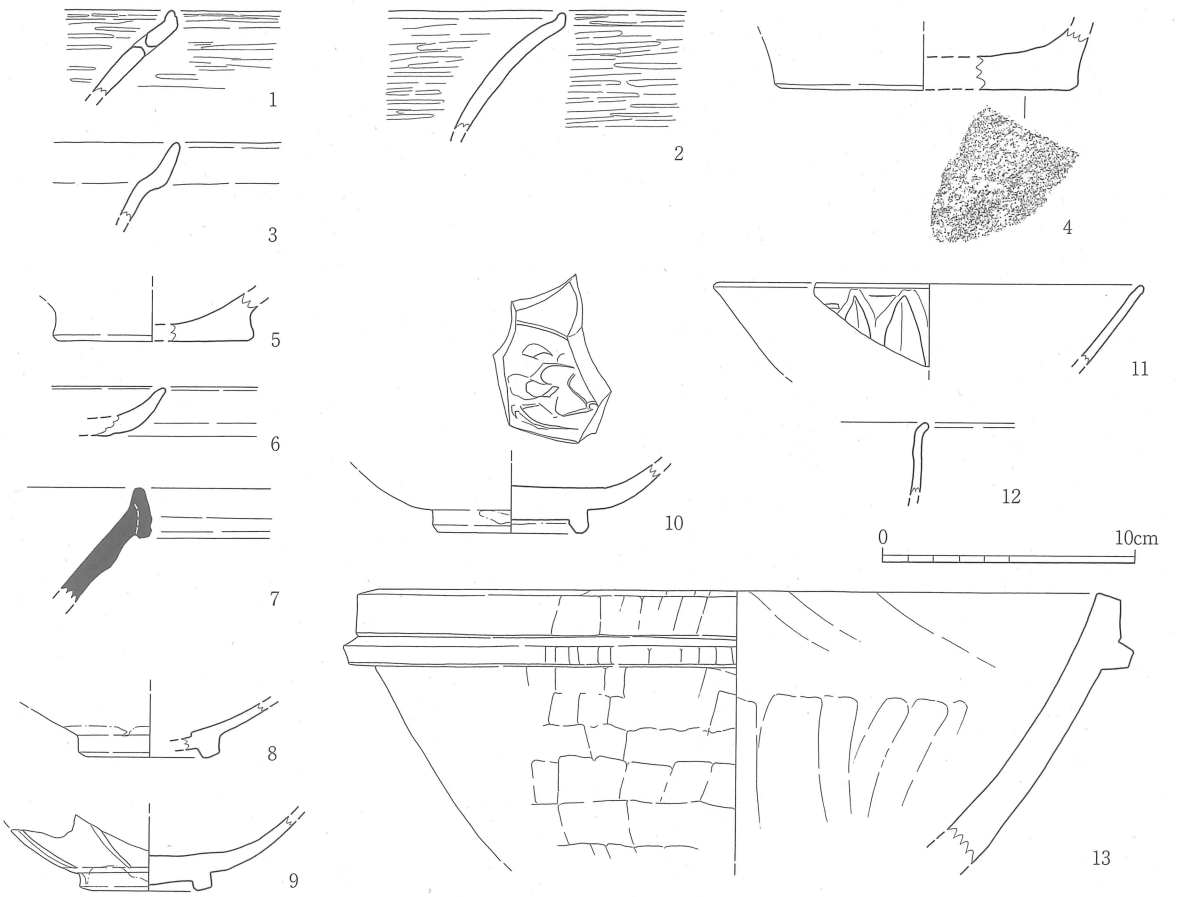
ピット出土遺物（図版10、第16図５～13）

５は縄文土器で、混じりこみである。浅鉢の底部であろう。内外面ともナデ調整。復元底径7.2cm。６は土師器皿の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整。底部は糸切り未調整。小片のため口径不明。ともに、P100出土。

７は須恵器壺の口縁部片。内面は灰被り、外面に自然釉が認められる。胎土は精良。P23出土。

８～11は青磁椀である。８の高台は露胎。底部と体部の境付近にケズリ出しによる段がつく。胎土は灰色、釉は灰緑色を呈する。復元高台径5.6cm。P35出土。９も高台は露胎。体部外面に区画のヘラ描きを施す。胎土は灰色、釉は暗灰緑色を呈する。高台径5.0cm。P84出土。10は高台まで施釉。底部内面にヘラ描きの文様を施し、底部と体部の境に沈線状の段がつく。胎土は灰色、釉は灰黄緑色を呈する。復元底径5.8cm。P332出土。11は体部外面に蓮弁を施す。蓮弁の鎬は鈍い。胎土は灰色、釉は灰黄緑色を呈する。復元口径17.0cm。包含層出土。

12は白磁片である。口縁端部が軽く外反する。小片のため口径不明。胎土は淡灰色で、釉は明るい灰色を呈する。包含層出土。



第16図　下小野遺跡　上層遺構出土遺物実測図（1/3）

13は石鍋である。外面の鍔から下にススが付着しているが、内面に整形痕が認められるため、それほど使い込んではいないと思われる。復元口径30.0cm。P28出土。

風倒木痕（図版６、第14図）

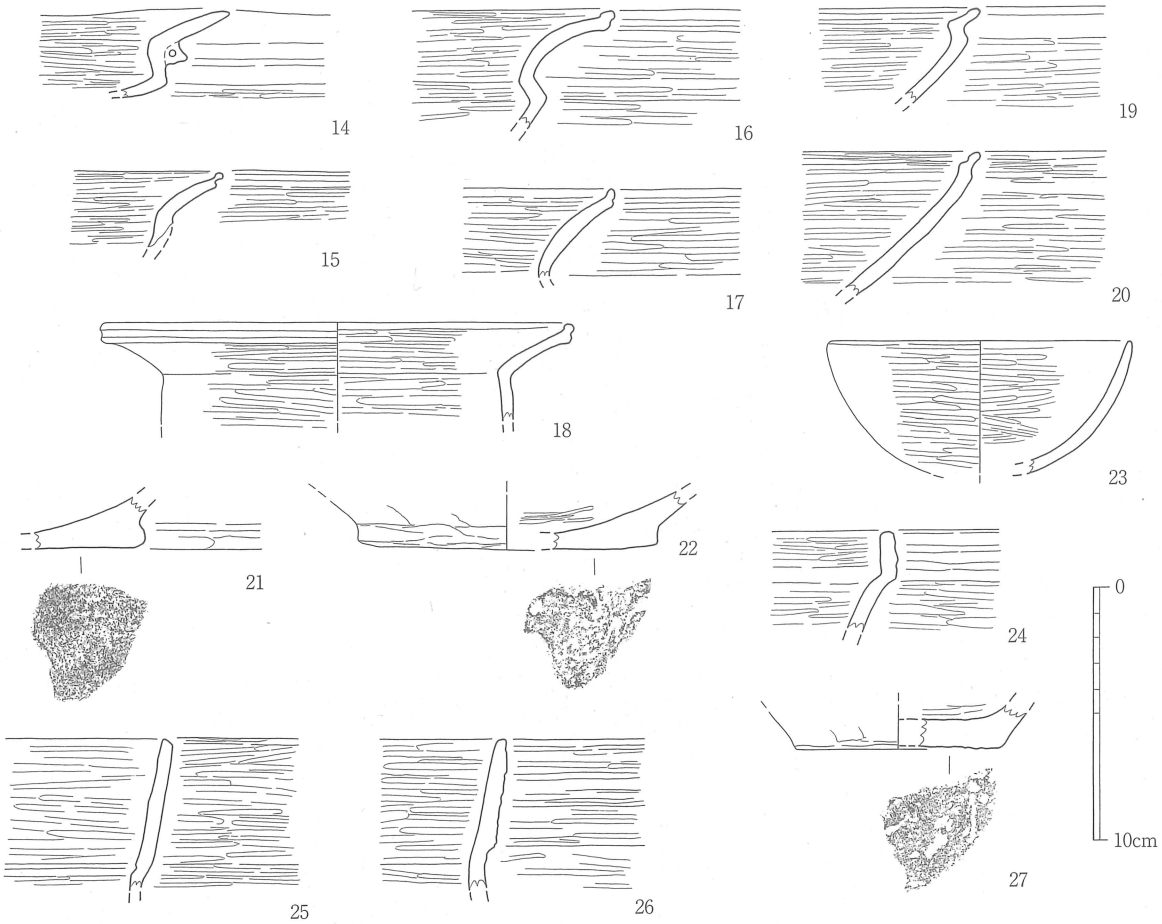
調査区の北隅付近に位置する。径は約3.0m、深さは0.8mを測る。黄褐色粘質土、暗赤褐色粘質土、黒色土、灰色土が堆積しており、黒色土、灰色土中から多くの遺物が出土した。

出土遺物（図版10、第17図14～28）

14～20は浅鉢である。14の口縁はあまり長くなく、直線的に外方に伸びる。波状口縁である。口縁下の屈曲部に断面三角形の突帯状の装飾を施す。15～18は大きく外反する口縁で、端部を摘むように丸く仕上げ、外面に１条の沈線を巡らす。16は屈曲部の稜がはっきりしている。18はやや直線的な口縁で、復元口径18.6cm。19・20は底部片で、20の復元底径は12.0cm。

21～23は椀型の土器である。22は素口縁の小型の椀である。内外面とも丁寧なミガキ調整。復元口径11.8cm、器高5.3cm。23は口縁下の屈曲部がはっきりしている。内外面ともミガキ調整。24は口縁下の屈曲部は凹線状になり、口縁部内面に沈線状のくぼみを巡らす。

24～27は深鉢である。24は直に立ち上がる口縁部外面に浅い沈線を２条巡らす。内外面ともミガキ調整。25は口縁がわずかに内湾し、端部を角張って仕上げる。26は長い直線的な口縁で、外面に沈線状の浅いくぼみを巡らす。28は底部片で、復元底径8.0cm。

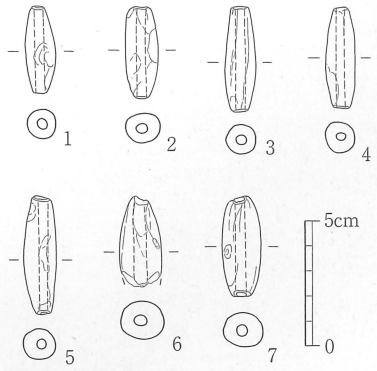


第17図　下小野遺跡　風倒木痕出土土器実測図（1/3）

出土土製品（図版10、第18図）

管状土錘が７点出土した。いずれも、包含層第５層または上層遺構からの出土である。計測値は第２表に示した。

寄遺跡で出土していた、両端を面取りし、孔径が小さいタイプは見られない。



第18図　下小野遺跡　出土土製品実測図（1/3）

遺物番号	器種	大きさ（cm）			重さ（g）	出土地点	備考
		長さ	最大径	孔径			
1	土錘	3.30	1.30	0.35～0.4	4.10	中段中央５層	完形
2	土錘	3.53	1.35	0.3～0.4	5.00	P6（E7-5層）	完形
3	土錘	4.10	1.20	0.38	4.70	P38（E6-5層）	完形
4	土錘	3.93	1.25	0.35	9.80	P332（F6-5層）	完形
5	土錘	4.55	1.35～1.40	0.3～0.4	7.40	溝１（C2区）	完形
6	土錘	3.5＋α	1.70	0.39	7.65＋α	P39（G4-5層）	
7	土錘	3.95	1.60	0.40	6.55	P4（D4-5層）	完形

第２表　下小野遺跡出土土製品計測表

下層遺構

１号土坑（図版７、第18図）

調査区西壁付近に位置する方形の土坑。長辺1.0m、短辺1.7m、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色粘質土。土器のほかに石鏃（第28図38）、石錘（第30図86）が出土した。

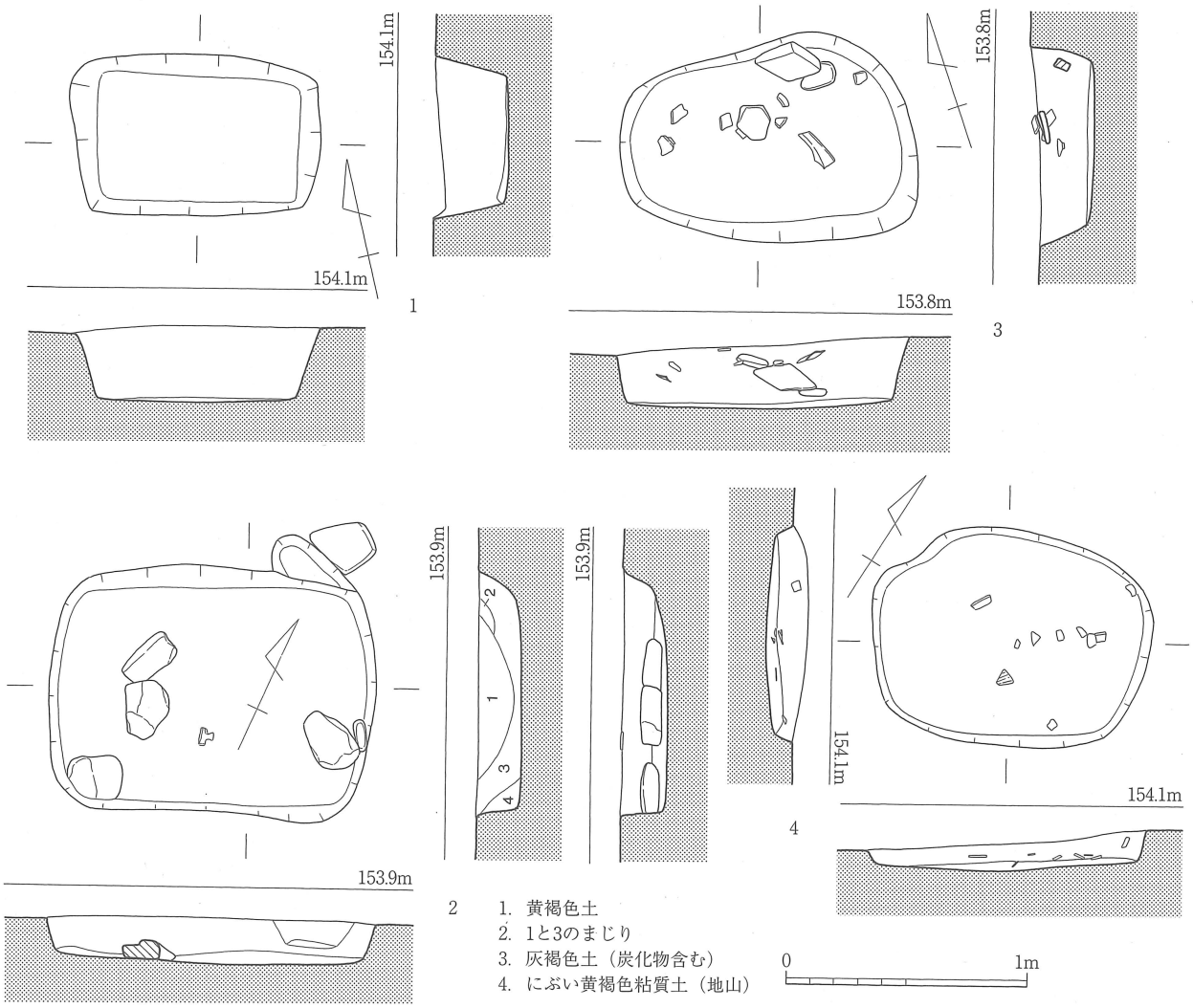
出土遺物（図版10、第19図28～30）

28・29は浅鉢である。28は、口縁部外面に浅い沈線を２条、屈曲部に１条の沈線を巡らす。復元口径24.0cm。29は口縁端部に浅い沈線を１条巡らす。小片のため口径は不明。

30は深鉢で、口縁部が直に立ち上がる。口縁部外面に沈線を２条巡らす。小片のため口径不明。

２号土坑（図版８、第18図）

調査区北西隅付近に位置する方形の土坑。長辺1.3m、短辺1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色粘質土で、多くの礫が含まれていた。土器のほかに十字型石器（第31図）、磨石（第35図）が出土した。



第19図　下小野遺跡　１～４号土坑実測図（1/30）

出土遺物（図版10、第19図31）

31は波状口縁を持つ浅鉢の口縁部片である。口縁端部は短く立ち上げる。内外面とも丁寧なミガキ調整。小片のため口径不明。

３号土坑（図版８、第18図）

調査区の北壁付近に位置する不整円形の土坑。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色土。土坑の中では最も多くの土器が出土したが、小片が多く、図示できるものは少ない。

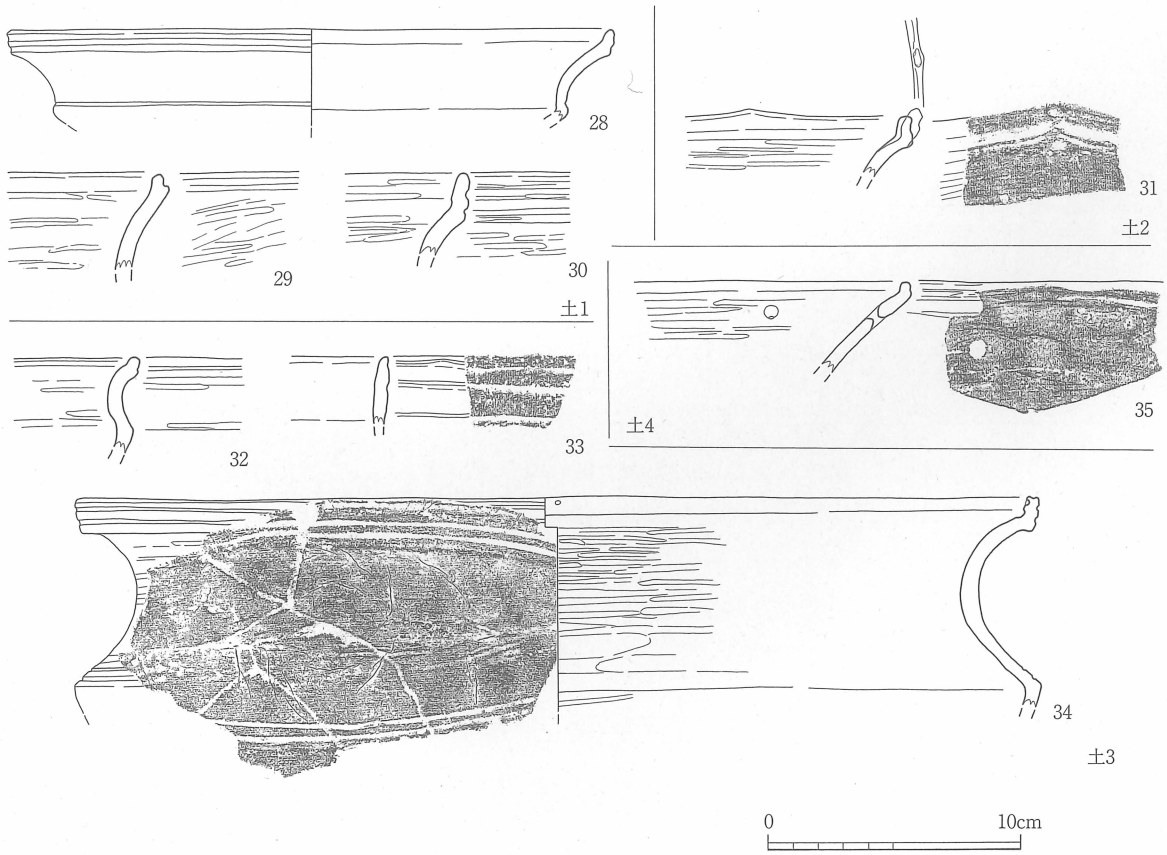
出土遺物（図版10、第19図32～34）

32は浅鉢である。端部を摘むように仕上げ、短く外反する口縁を持つ。

33は深鉢の口縁片である。外面に細い沈線を巡らす。小片のため口径不明。34も深鉢である。口縁端部は短く立ち上がり、口縁部に２条、屈曲部に２条の沈線を巡らす。口縁部内面に１ヶ所、刺突文が認められる。内外面ともミガキ調整。復元口径38.0cm。

４号土坑（図版８、第18図）

調査区の北壁付近に位置する不整円形の土坑。長軸1.15m、短軸0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色土。土器のほかに石鏃（第28図28）、炭化種実が出土した。



第20図　下小野遺跡　１～４号土坑出土土器実測図（1/3）

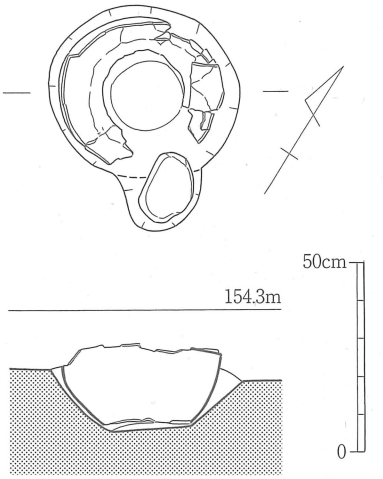
出土遺物（図版10、第19図35）

35は浅鉢で、大きく外反する長い口縁部を持つ。口縁端部は折り曲げるように短く立ち上げる。焼成後の穿孔が見られる。内外面とも丁寧なミガキ調整。

埋甕（図版９、第20図）

調査区南西隅付近に位置する。径は0.5mで、深さ0.2mほどしか残っていない。

底部を打ち欠いた深鉢の体部が直立の状態で検出されたが、屈曲部のやや上までしか残存していない。口縁部も出土したが深鉢体部と同一個体ではなく、合せ甕状に用いられた別個体の口縁部の可能性もある。埋甕の中からは何も検出できなかった。



第21図　下小野遺跡　埋甕実測図（1/20）

出土遺物（図版10・11、第21図36・37）

36は深鉢の口縁部片である。口縁部下で緩く屈曲し、体部となる。内外面に条痕が残る。復元口径39.8cm。

第22図　下小野遺跡　埋甕出土土器実測図（1/3）

37は深鉢の体部である。体部やや上方で緩く屈曲する。内外面とも条痕が残る。内外面にススが付着している。体部最大径は41.1cmである。

胎土と焼成の具合から、36と37は別個体である。

不明遺構（図版９、第22図）

調査区北西隅に位置する。長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。床面に小礫を敷き詰めている。墓ではないかと推測している。

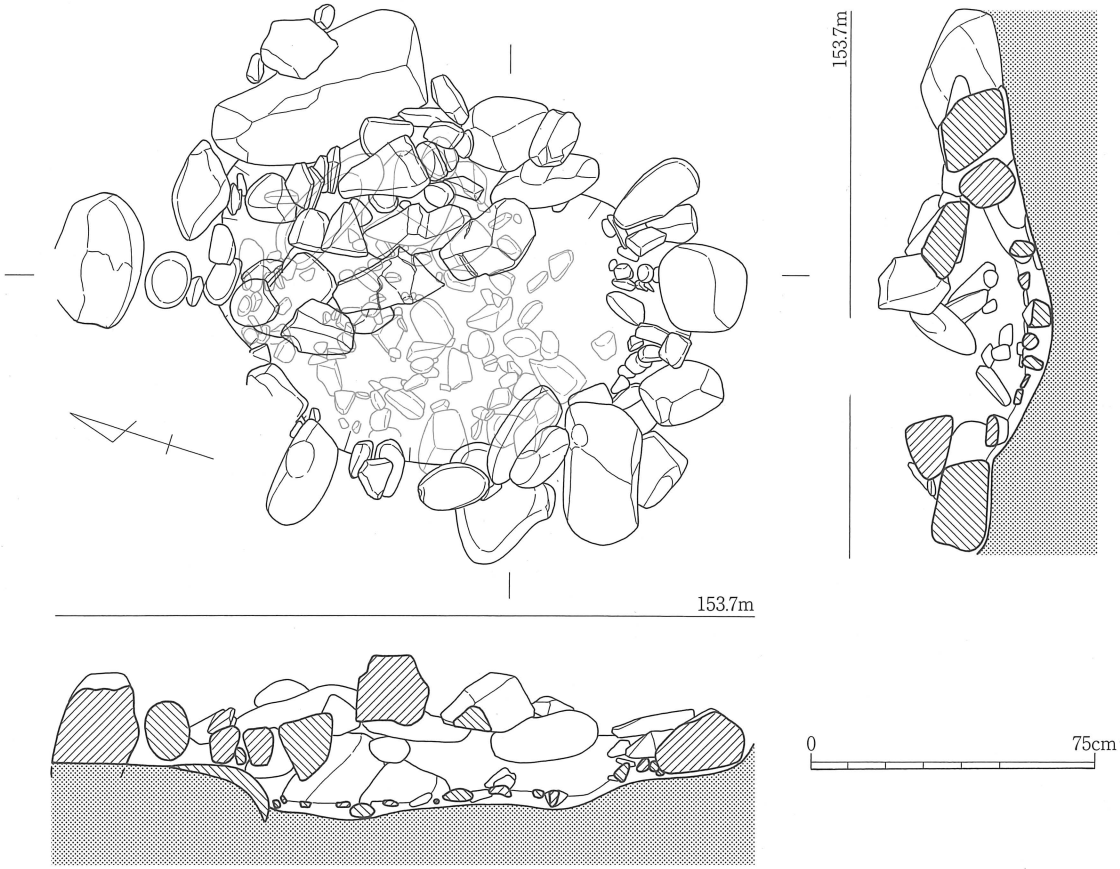
埋土は暗褐色土で、遺構内部に多くの礫が落ち込んでいたが、遺物は出土しなかった。

ピット出土土器（図版10・11、第24図38～76）

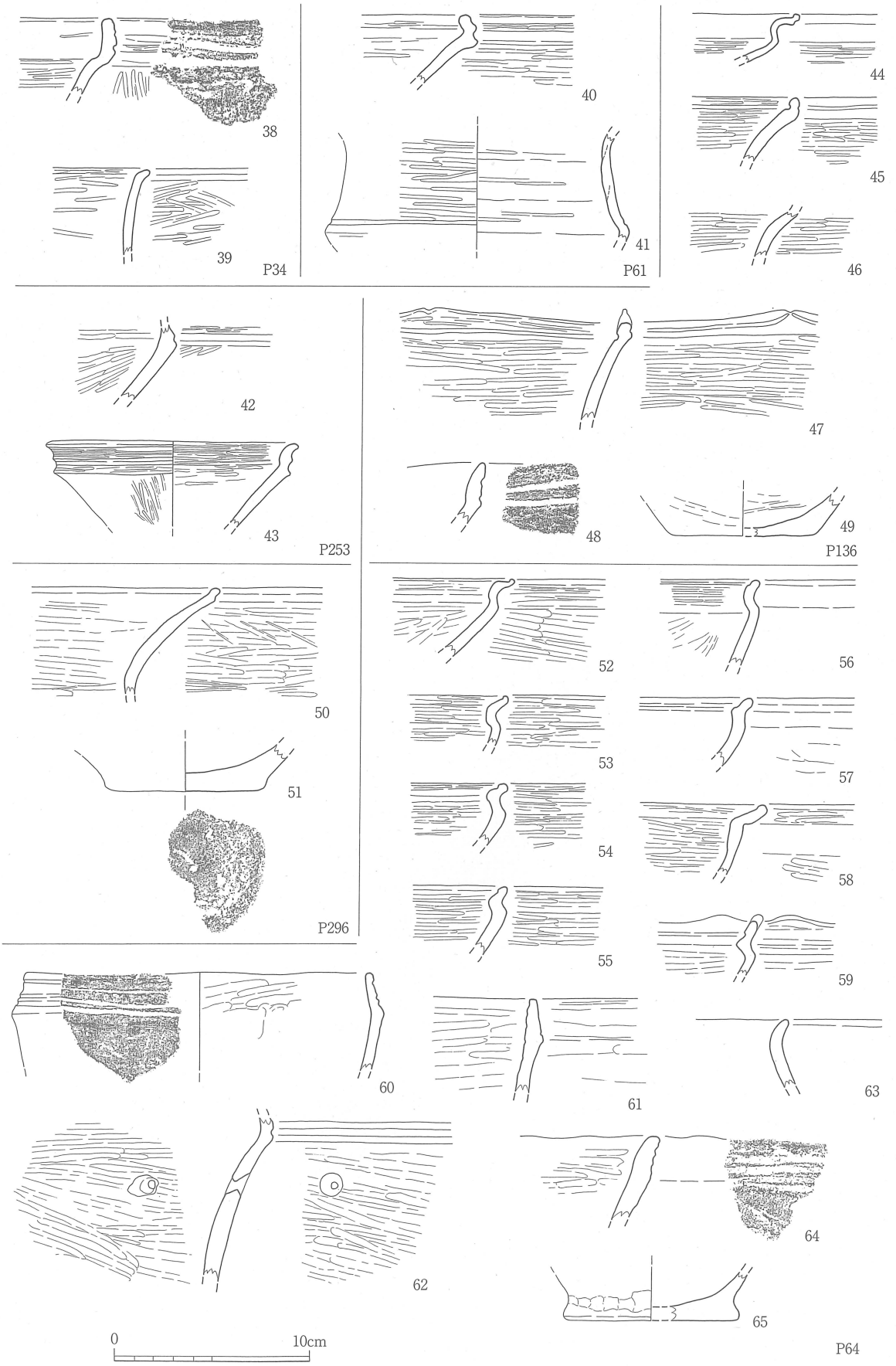
38は深鉢の口縁部片で、外面に沈線を2条巡らす。口縁部下は縦方向のミガキ痕が残る。39は深鉢か。口縁端部を外側に短く折り曲げるように仕上げ、器壁は薄い。内外面に不定方向のミガキ痕が残る。P34出土。

40は口縁端部を内側に短く折り込み、外面に凹線を巡らす。口縁部の傾きから浅鉢であろう。41は小型深鉢の体部片である。屈曲部に1条の沈線を巡らす。口縁部は欠失している。P61出土。

42は浅鉢の体部片である。屈曲部外面に沈線が1条巡る。43は小型の浅鉢である。口縁部は外反気味で、外面に凹線を巡らす。復元口径12.8cm。P253出土。



第23図　下小野遺跡　不明遺構実測図（1/20）



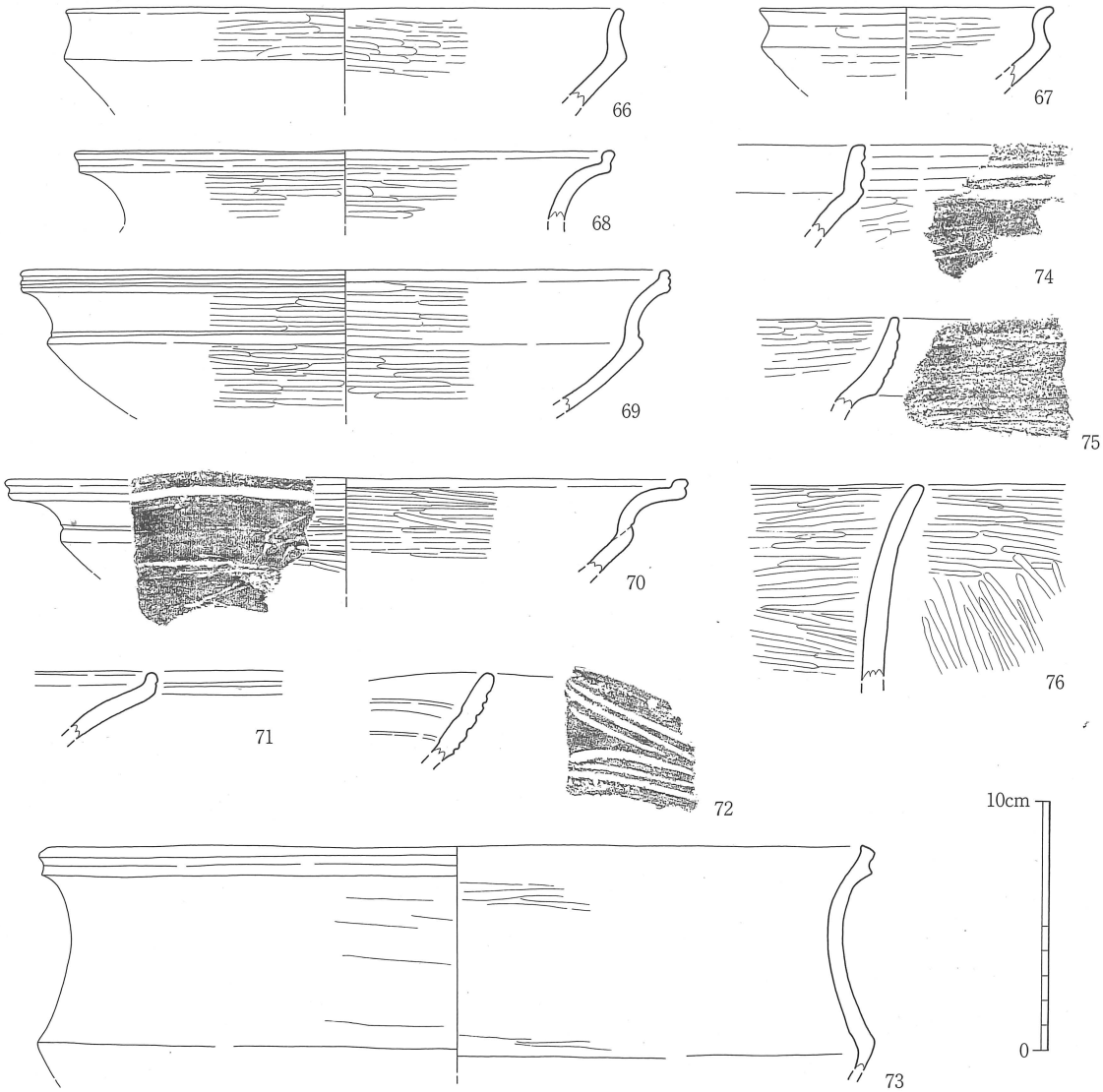
第24図　下小野遺跡　ピット出土土器実測図①（1/3）

44～46は浅鉢の口縁部片。44の口縁部は短く、折れ曲がるように外反する。45は口縁端部の内外面にそれぞれ１条の沈線を巡らす。47は波状口縁で、口縁部外面には口縁に沿って沈線を施し、内面には１条の沈線を巡らす。内外面とも丁寧なミガキ調整。48は深鉢の口縁部小片である。口縁部外面に２条の沈線を巡らす。49は深鉢の底部片。復元底径7.6cm。P136出土。

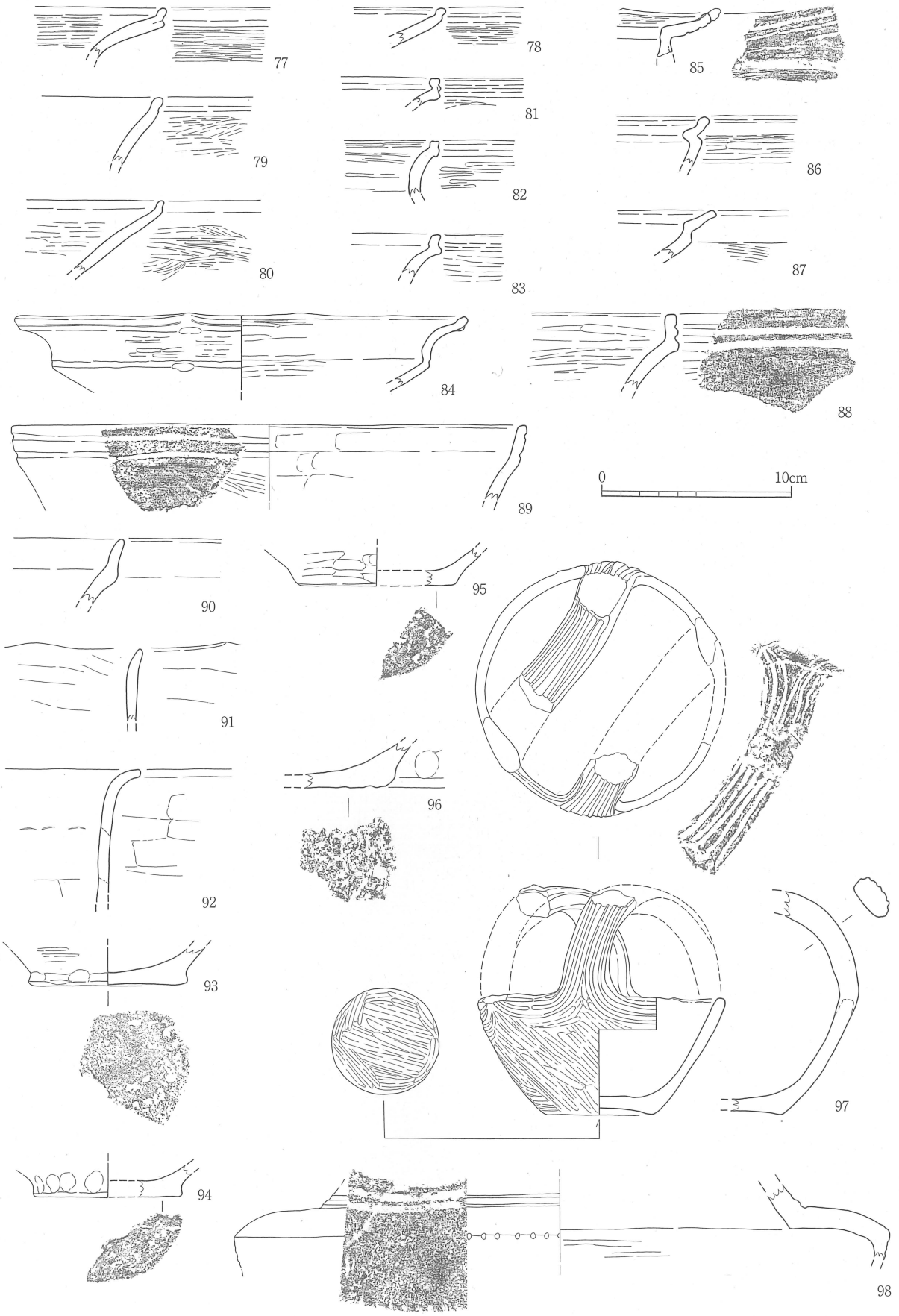
50は浅鉢の口縁部片である。端部は短く外へ摘み出すように仕上げる51は深鉢の底部片であろう。復元底径8.0cm。P296出土。

52～59は浅鉢の口縁部片である。52～57は口縁部内面が凹線状にくぼむ。そのうち、52～55は内外面とも丁寧なミガキ調整。58は内湾気味の口縁部で、体部は張らない。59は波状口縁で、口縁部内面が凹線状にくぼむ。P64出土。

60～65は深鉢である。60は薄手で、口縁部外面に３条の沈線を巡らす。61は内外面に条痕が残る。62は口縁端部を欠失しているが、60と同タイプの深鉢である。内外面とも丁寧なミガキ調整で、焼成後の穿孔が見られる。63は短く外反する口縁部である。内外面ともナデ調整。



第25図　下小野遺跡　ピット出土土器実測図②（1/3）



第26図　下小野遺跡　包含層（第５層）出土土器実測図（1/3）

64は口縁端部が不規則に波打っていて、口縁部外面には沈線状のくぼみがみられる。内外面とも条痕が残る。65は底部片で、全体に摩滅しているが、指頭痕が残る。P64出土。

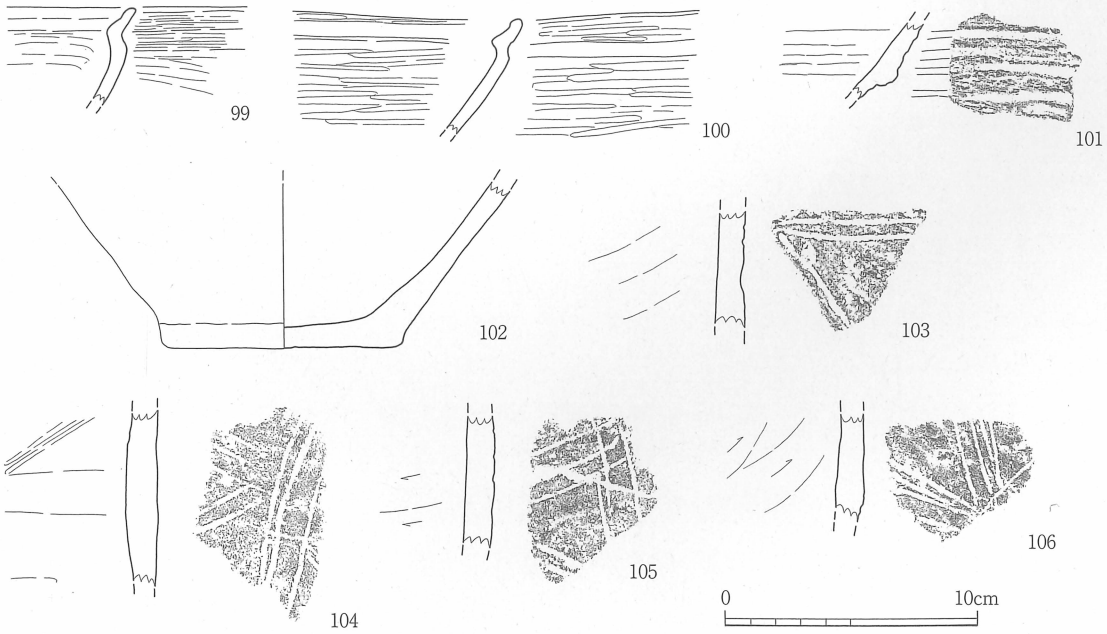
66～70は浅鉢である。66と67は直に立ち上がる口縁部が短く外反する。66は復元口径22.2cm、P193出土。67は復元口径11.8cmと小型。P17出土。68～71は大きく外反する口縁で、口縁端部に沈線を巡らす。68は復元口径21.6cm、P44出土。69は屈曲部に1条の沈線。復元口径26.0cm、P318出土。70は内外面とも丁寧なミガキ調整で、屈曲部に1条の沈線。復元口径27.2cm。P127出土。

72～76は深鉢である。72は波状口縁で、口縁部外面に沈線による装飾を持つ。内面にも沈線あり。内外面とも丁寧なミガキ調整。P56出土。73は口縁部外面に1条の沈線を巡らす。つくりは雑。復元口径23.5cm。P37出土。74は直に立ち上がる口縁部の外面に、凹線状の沈線を巡らす。P67出土。75は内湾気味の口縁部。内外面とも条痕が残る。P52出土。76は口縁端部を角張って仕上げる。内面と口縁部外面は横方向のミガキ調整。体部外面は縦方向のミガキ調整。P128出土。

包含層（第５層）出土土器（図版10、第26図）

77～87は浅鉢である。77～78は口縁端部を丸く仕上げ、外面に凹線ないし沈線が巡る。77は非常に丁寧なミガキ調整。80は短く口縁端部を立ち上げる。81～83は口縁端部を短く立ち上げ、外面に凹線ないし沈線が巡る。84は波状口縁で、口縁は大きく外反する。口縁部外面に細い沈線による装飾を施す。口縁部外面にススが付着している。復元口径24.0cm。85も波状口縁だが、口縁は内湾気味で口縁下で屈曲する。口縁部外面に沈線による装飾を施す。86は口縁端部の内側に丸く厚みを持たせて仕上げる。87は屈曲後直線的に外方へ伸びる口縁で、端部をやや角張って仕上げる。

88～96は深鉢である。88・89は口縁部外面に２条の沈線を巡らす。89の復元口径27.2cm。90は口縁部を直に立ち上がる口縁である。91は緩やかな波状口縁で、わずかに外反する。92は短く外反する口縁。接合痕が見え、仕上げは雑。93～96は底部片。いずれも摩滅気味で調整は不明なものの、指頭痕は残る。96の内面には炭化物が付着している。復元底径は、93が8.4cm、94が7.6cm、95が



第27図　下小野遺跡　包含層（第６層）出土土器実測図（1/3）

8.3cm。

97は篭型土器とでも呼べばよいのだろうか。上底で素口縁の杯に、平たい把手を２本取付けている。杯部の器壁よりも把手の方が厚みがあり、全器高の約半分を把手が占める。把手の上面から杯部口縁を沈線で装飾する。杯部外面、底部外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。口径13.1cm、全器高12.1cm、杯部器高6.2cm、底径5.6cm。

98の器形は壺状になるのか。頸部に２条の沈線、体部に刻み目状の装飾を施す。器壁が厚く、胎土に細砂粒を多く含み、他の出土土器と比較して異質な印象を受ける。

包含層（第６層）出土土器（図版10、第27図）

第５層と比較して、石器は同量程度出土しているが、土器の出土量は非常に少ない。

99・100は浅鉢である。口縁端部内面を丸みをもって仕上げる。屈曲部内面は稜がはっきりしているが、外面は凹線状になっている。100は緩やかな波状口縁である。

101は深鉢口縁部片である。端部は欠失している。外面に浅い沈線が巡る。内面には条痕が残る。102は深鉢の底部である。全体に摩滅が著しく調整不明。底径9.4cm。

103～106は、出土地点はまちまちだが、同一固体の破片と思われる。器壁は厚く、外面に線刻による装飾を施している。砂粒を多く含み、赤褐色を呈している。本遺跡の主体をなす時期よりも古い時期の土器と思われる。

出土石器・石製品（図版11・12、第28～35図）

各遺構および包含層から各種の石器が出土した。法量と石材は第３表に示している。

石槍が２点出土した。１点は包含層第6層から、もう１点は包含層第５層からの出土で、いずれも安山岩製である。

石鏃は71点出土し、そのうちの60点を図示している（第28図３～62）。出土した71点に用いられた石材は、漆黒の黒曜石が41点、姫島産黒曜石が1点、安山岩が26点、チャートが3点である。また、全て無茎で、石材は形態に左右されない。凹茎が50点（3～45）で、そのうち13点（25～37）は肩を持つ。また、第28図38～45は主要剥離面を残している。平茎が10点（46～55）、円茎が7点（56～62）、不明７点である。59は円茎に含めたが、尖茎である。

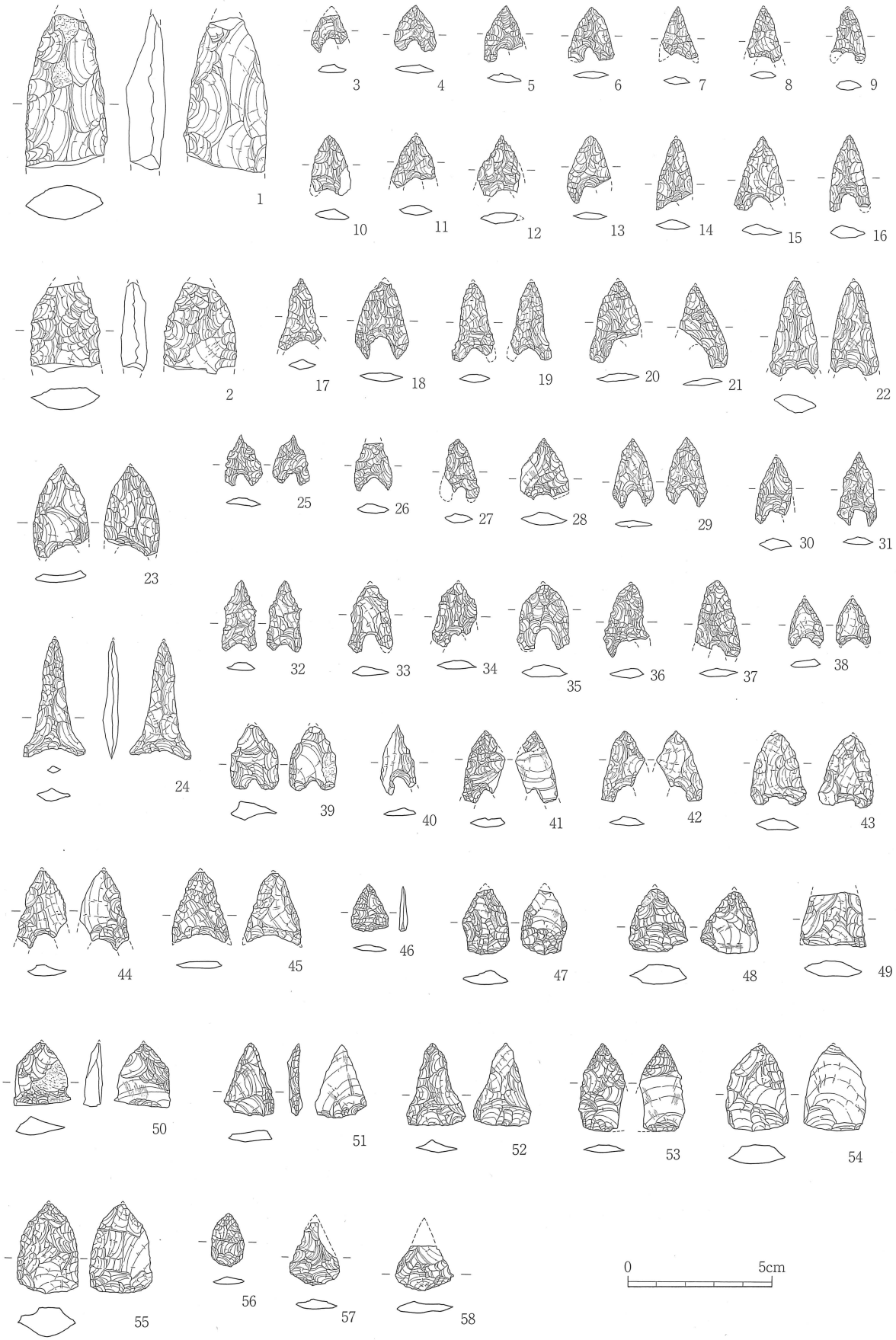
他に打製石器は削器（第29図63～68）、石匙（69）、ドリル（70）、つまみ形石器（71・72）、異形石器（73）が出土している。石匙は風化が進んでいる。異形石器は姫島産黒曜石製で、表採されている。両端を欠失しており、全体の形態は不明である。

剥片は３点を図示した（第29図74～76）。

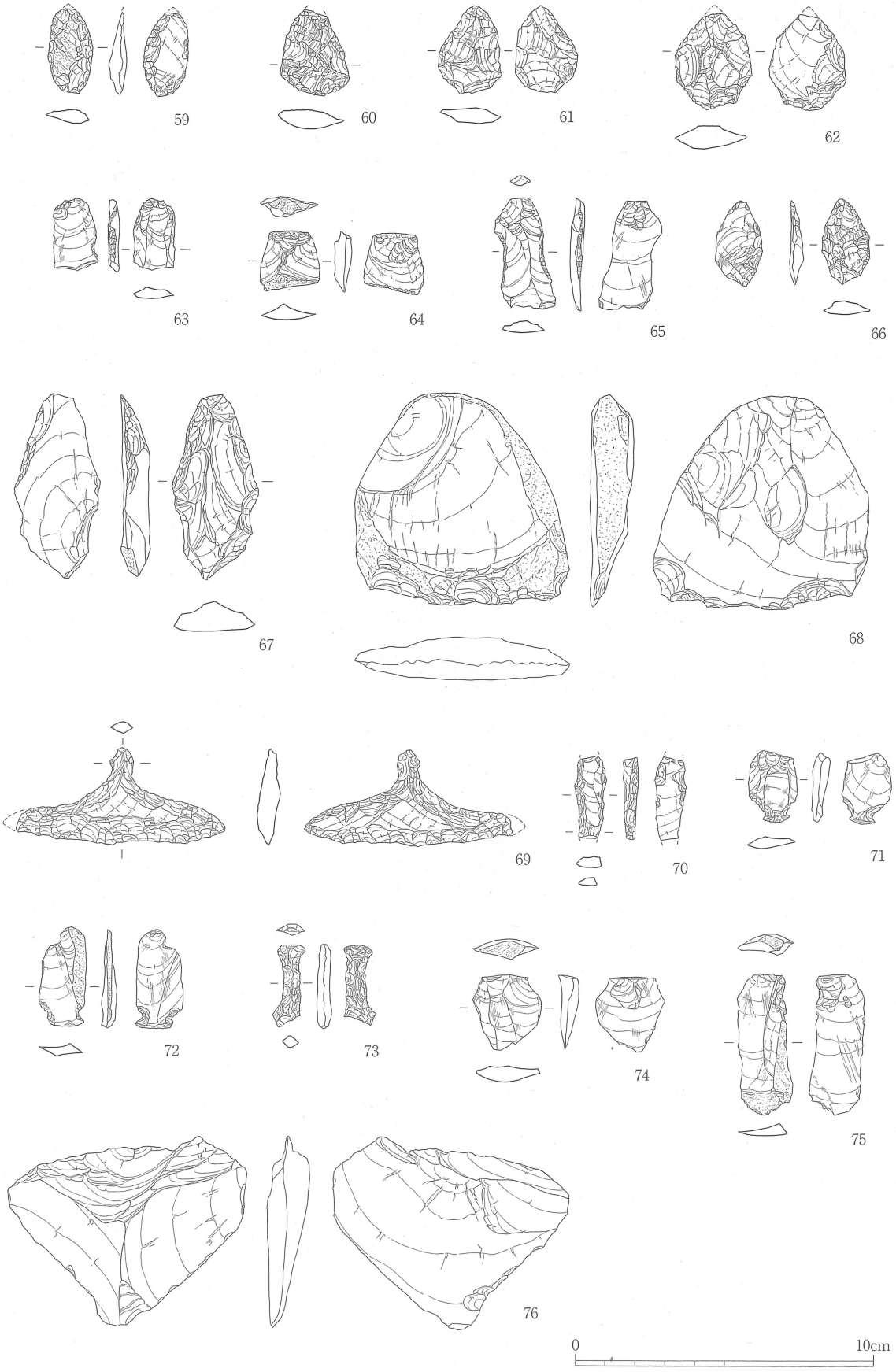
石錘が13点出土したが、礫の両端を打ち欠く石錘４点（第30図86～89）のほかに、当遺跡を代表する特徴的な石錘が出土している。ごく小さな礫に細い溝を彫ったもので、９点出土した（第30図77～85）。さらに詳しく見ると、小円礫で溝が全周するものが2点（77・78）、小円礫の両端に溝を有するものが６点（79～84）、扁平な礫に溝を巡らしているものが１点（85）である。

十字形石器が２点出土している（第31図91・92）。どちらも片岩製で、一部を欠失している。打製石斧は３点出土しており（第31図93～95）、いずれも片岩製である。

包含層第６層を掘削中に、安山岩の石核と剥片が出土した（第32図96・97）。出土状況を図版10に



第28図　下小野遺跡　出土石器実測図①（1/2）



第29図　下小野遺跡　出土石器実測図②（1/2）

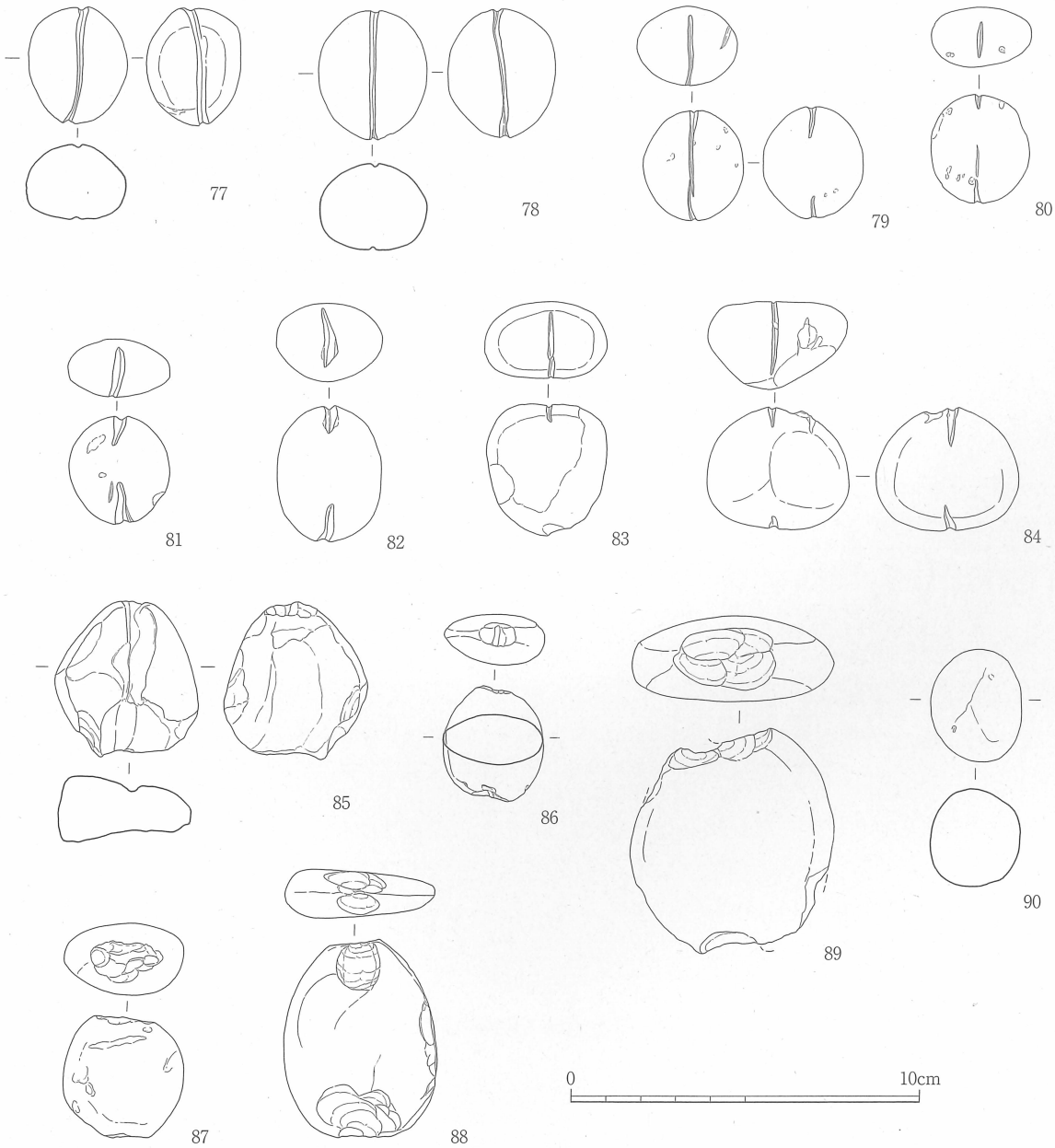
掲載している。

磨製石斧は蛇紋岩製の定角式石斧が１点、乳棒状石斧が６点出土している（第33図98～104）。102が風倒木痕から出土している他は、みな包含層第５層からの出土である。

103の石斧は、その身に黒い円弧状の線文様が認められる。線文様は石材の節理に直交しており、線の中央にはごく細い線状痕が認められる。線文様が石斧の側面で交差しているなど、意図的に文様を施した可能性が高いが、その場合の施文方法や用いた顔料は不明。あるいは、着装に関係している可能性もある。また、刃大きく欠けた後にもう一度刃部を作り出しているが、使用はしていない。

凹石、磨石も多数出土した（第34・35図）。ほとんどが包含層第6層からの出土である。1号溝から出土した凹石もあるが、混じり込みである。

他に図示していないが、敲石、台石も出土した。

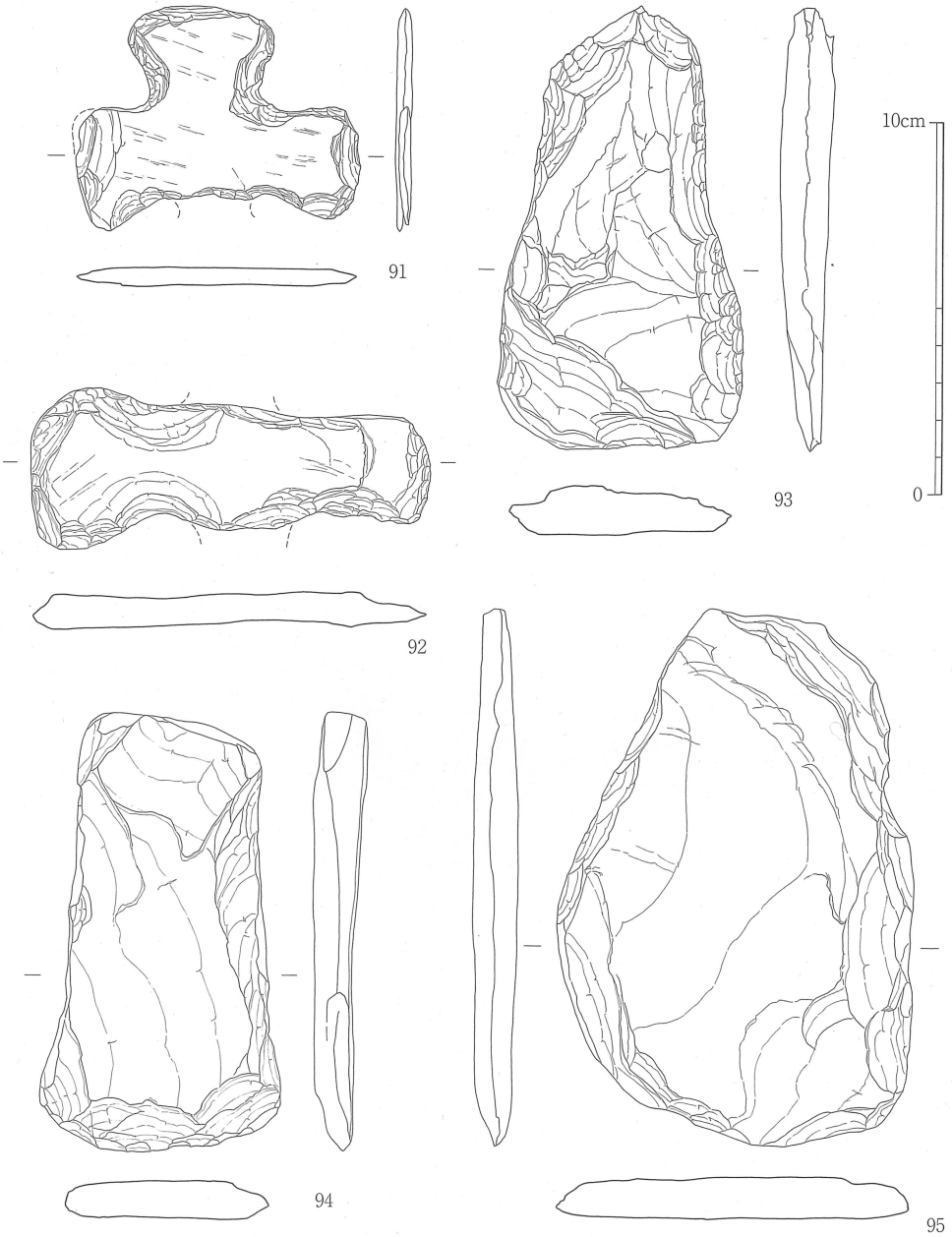


第30図　下小野遺跡　出土石器実測図③（1/2）

3 小 結

下小野遺跡は、星野川が作り出した谷が最も広く開ける地点である。日照がよく、平坦地も広い。周辺では発掘調査は行われておらず詳しい状況はわからないが、やや下流の光延遺跡、上流の岩野遺跡で縄文時代の遺物が採集されている。今回も事業地のみが調査対象であったためごく一部の発掘調査にとどまっているが、一帯に集落遺跡が広がっていると見てよいだろう。

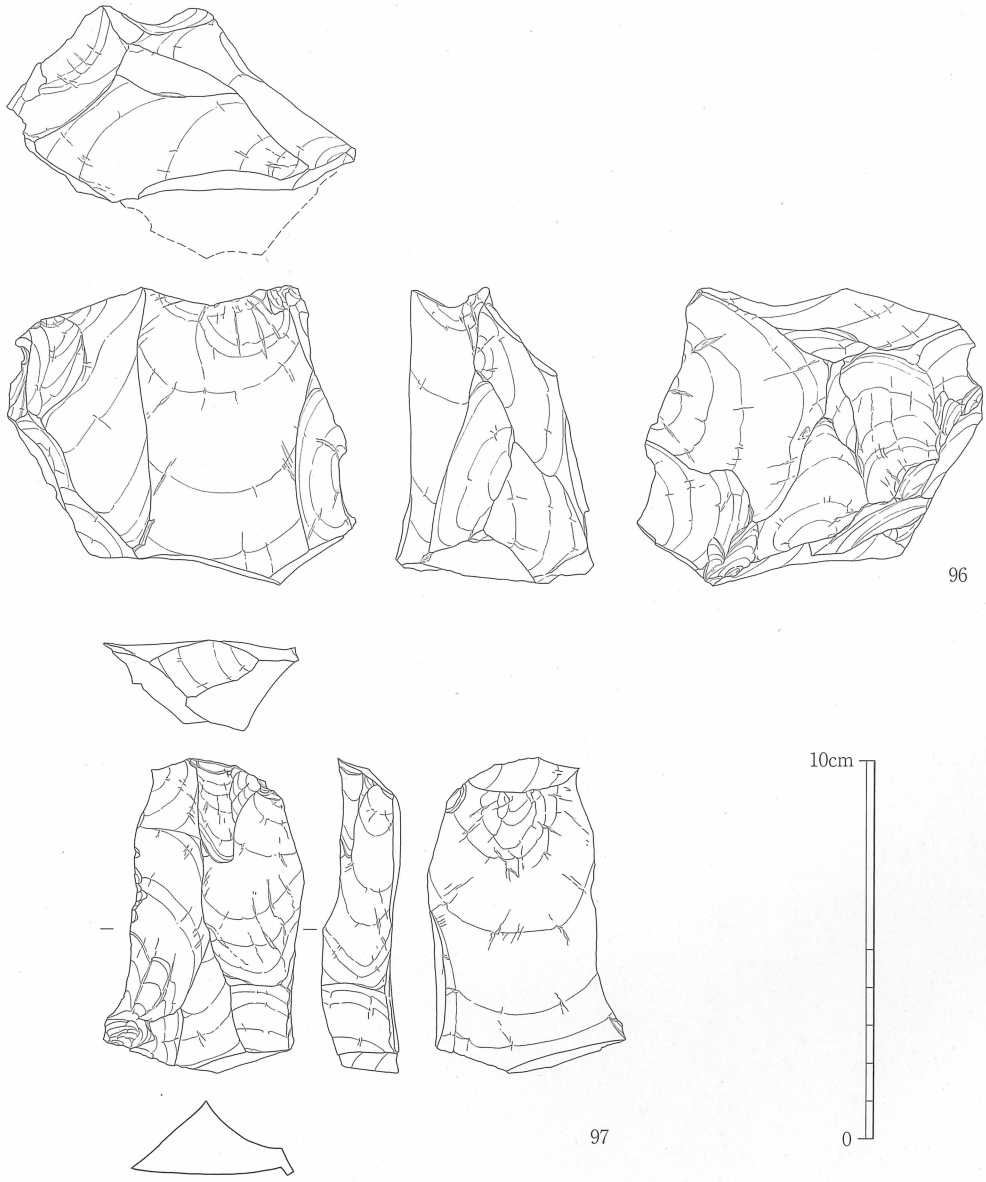
中世の遺構は１号溝とピットで、上層（包含層第５層上面）で検出した。この面では縄文期の遺構も検出しており、後世の水田耕作に伴い若干の削平を受けている。出土遺物が少なく、正確な時



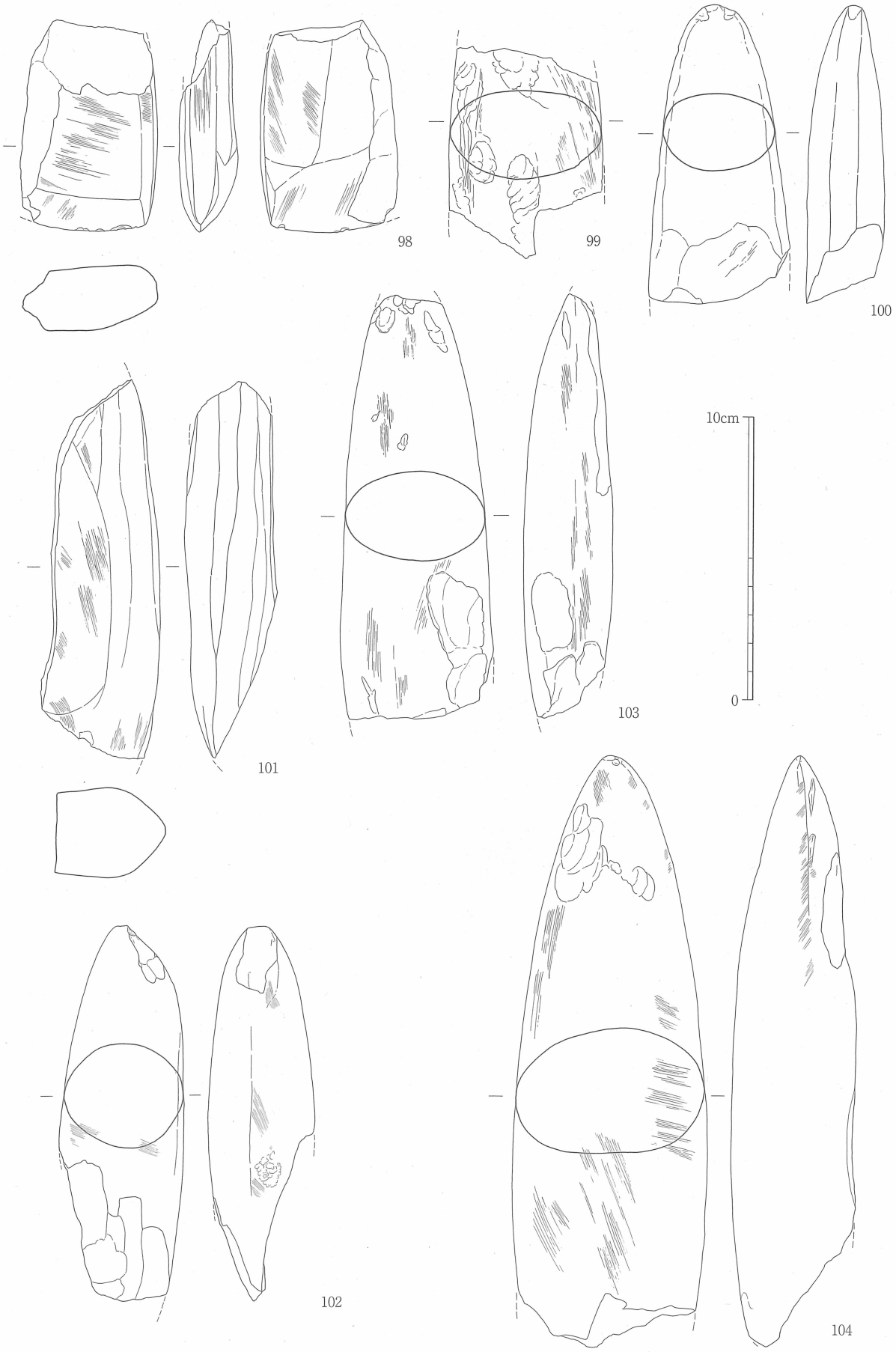
第31図　下小野遺跡　出土石器実測図④（1/2）

期を絞り込むのが難しいが、青磁椀に新しい様相が見られることから、寄遺跡と同じ、13世紀頃と考えている。比較的広い土地が確保できるため建物跡があってよいと思われるが、あるとすればもう少し尾根寄りであろうか。

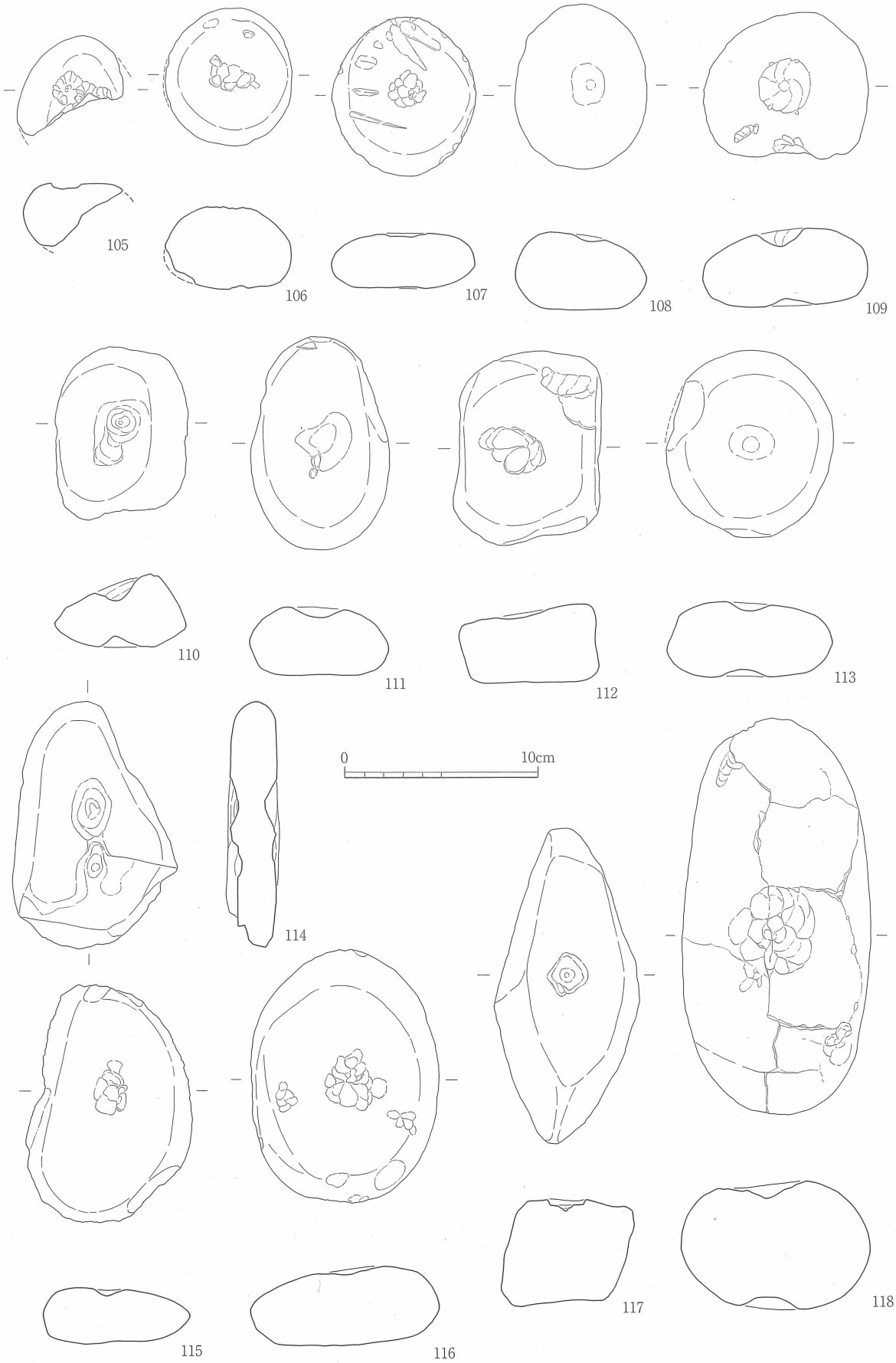
縄文時代の遺構は１～４号土坑、埋甕、不明遺構、ピットである。風倒木痕は上層で検出できたため、上層遺構として報告したが、出土した遺物は縄文期のものばかりである。遺構、包含層第5層とも、土器は縄文時代晩期後葉の黒川式土器が主体である。本遺跡よりもかなり上流に位置する十籠星野小学校遺跡もほぼ同時期の集落である。



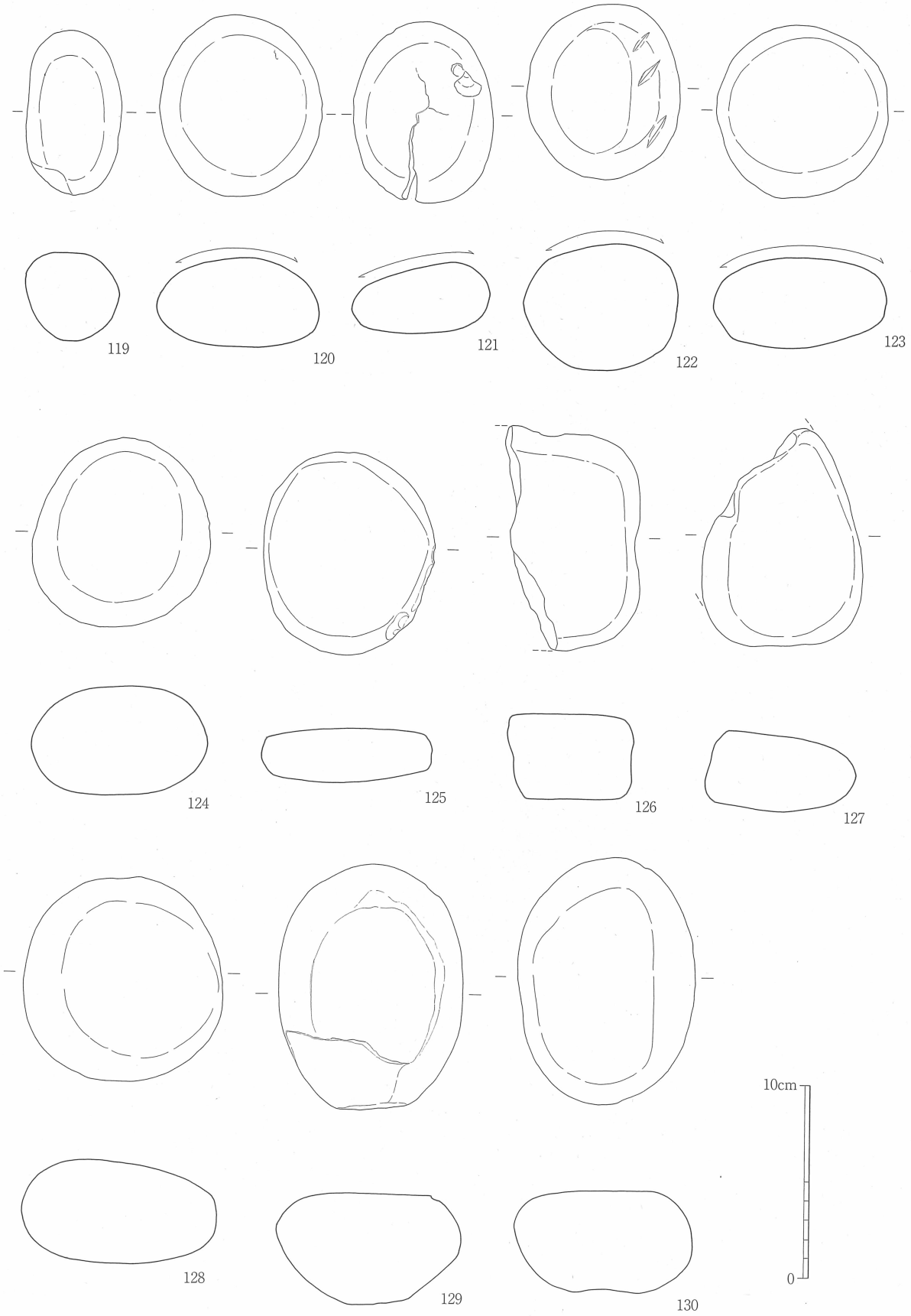
第32図　下小野遺跡　出土石器実測図⑤（1/2）



第33図　下小野遺跡　出土石器実測図⑥（1/2）



第34図　下小野遺跡　出土石器実測図⑦（1/3）



第35図　下小野遺跡　出土石器実測図⑧（1/3）

挿図番号	遺物番号	器種	大きさ（cm）			重さ（g）	出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ			
28	1	石槍	5.35+α	2.75	1.35	22.50	P362（D5-6層）	安山岩
28	2	石槍	2.90+α	2.45	0.91	7.80	中段中央5層	安山岩
28	3	石鏃	1.20+α	1.22+α	0.30	0.35	P91（E4-5層）	黒曜石
28	4	石鏃	1.60	1.45	0.33	0.50	風倒木痕	黒曜石
28	5	石鏃	1.90	1.30	0.31	0.65	P1（ER4-5層）	黒曜石
28	6	石鏃	1.88	1.58	0.30	0.78	№13（F4-5層）	安山岩
28	7	石鏃	1.80+α	1.20	0.36	0.55	№15（F4-5層）	安山岩
28	8	石鏃	1.95	1.13	0.28	0.55	P200（F5-6層）	安山岩
28	9	石鏃	1.72+α	1.15	0.40	0.60	中段中央5層	黒曜石
28	10	石鏃	2.10	1.40+α	0.43	1.20	風倒木痕	チャート
28	11	石鏃	1.73+α	1.60+α	0.40	0.78	№26（D3-5層）	黒曜石
28	12	石鏃	2.05	1.48	0.43	1.05	№10（G3-5層）	黒曜石
28	13	石鏃	2.21	1.50	0.28	0.75	P328（G6-6層）	姫島産黒曜石
28	14	石鏃	2.30+α	1.22	0.40	0.75	№44（G4-6層）	安山岩
28	15	石鏃	2.55	1.50	0.40	1.20	P201（F4-6層）	安山岩
28	16	石鏃	2.60	1.45	0.46	1.05	№24（F4-5層）	安山岩
28	17	石鏃	2.40	1.40	0.32	0.80	P200（F5-6層）	安山岩
28	18	石鏃	2.60+α	1.80	0.37	1.20	P79（E3-5層）	黒曜石
28	19	石鏃	2.65+α	1.46+α	0.35	0.90	№24（F4-5層）	安山岩
28	20	石鏃	2.85	1.50	0.35	1.10	P26（F5-5層）	黒曜石
28	21	石鏃	2.85	1.48	0.30	0.90	№60（F6-6層）	安山岩
28	22	石鏃	3.23+α	1.76+α	0.73	3.40	№35（G5-6層）	安山岩
28	23	石鏃	3.05+α	1.87	0.55	2.80	№31（F5-6層）	チャート
28	24	石鏃	4.01+α	2.23	0.55	2.45	№30（F5区）P305上層	安山岩
28	25	石鏃	1.80	1.32	0.33	3.40	№32（F5-6層）	黒曜石
28	26	石鏃	1.65+α	1.30	0.40	2.80	№43（D2-6層）	黒曜石
28	27	石鏃	2.00+α	1.25	0.38	2.45	中央部上段6層	黒曜石
28	28	石鏃	2.05	1.67	0.50	0.50	土坑4（C4-6層）	黒曜石
28	29	石鏃	2.40	1.32	0.30	0.30	№22（F5-5層）	黒曜石
28	30	石鏃	2.20	1.15+α	0.47	0.47	P3（D4-5層）	黒曜石
28	31	石鏃	2.53	1.35	0.31	0.75	P159（G6-5層）	黒曜石
28	32	石鏃	2.45	1.20	0.29	0.65	№2（C6-5層）	黒曜石
28	33	石鏃	2.22+α	1.58	0.35	1.05	P200（F5-6層）	安山岩
28	34	石鏃	2.22+α	1.50+α	0.35	0.90	P199（D6-6層）	黒曜石
28	35	石鏃	2.28+α	1.68	0.50	1.60	P372（F3-6層）	黒曜石
28	36	石鏃	2.60+α	1.50	0.40	0.95	P94（D4-5層）	黒曜石
28	37	石鏃	2.65+α	1.55	0.32	0.90	P202（E4-6層）	黒曜石
28	38	石鏃	1.60+α	1.12	0.24	0.45	土坑1（G4-6層）	安山岩
28	39	石鏃	2.20+α	1.60	0.50	1.55	6層	チャート
28	40	石鏃	2.35+α	1.33	0.24	0.60	風倒木痕	安山岩
28	41	石鏃	2.53+α	1.30	0.48	1.05	中段西側6層	黒曜石
28	42	石鏃	2.46	1.55	0.33	0.80	6層	安山岩
28	43	石鏃	2.48+α	1.95	0.45	1.95	P16（E5-5層）	安山岩
28	44	石鏃	2.63+α	1.70+α	0.32	1.50	P18（E5-5層）	安山岩

第３表　下小野遺跡出土石器計測表①

挿図番号	遺物番号	器種	大きさ（cm）			重さ（g）	出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ			
28	45	石鏃	2.40+α	1.95	0.30	1.25	P19（E5-5層）	安山岩
28	46	石鏃	1.41	1.35	0.31	0.55	中段中央5層	黒曜石
28	47	石鏃	2.50+α	1.55	0.55	1.75	中段西側5層	黒曜石
28	48	石鏃	2.10+α	2.10	0.72	2.65	P59（F3-5層）	黒曜石
28	49	石鏃	1.90+α	2.85	0.58	2.70	№39（G4-6層）	安山岩
28	50	石鏃未製品	2.60	1.93	0.69	2.45	P221（E5-6層）	黒曜石
28	51	石鏃	2.50	1.67	0.44	1.55	上段中央6層	黒曜石
28	52	石鏃	2.83	2.00	0.60	2.30	№14（F4-5層）	安山岩
28	53	石鏃	3.02	1.70	1.38	1.35	P157（G6-5層）	黒曜石
28	54	石鏃	2.95+α	2.05	0.72	4.05	P65（F2-5層）	安山岩
28	55	石鏃未製品	3.10	2.20	1.09	6.30	P75（E3-5層）	安山岩
28	56	石鏃	1.80	1.10	1.31	0.55	風倒木痕	黒曜石
28	57	石鏃	2.15+α	1.75	0.44	1.00	№25（E1-5層）	黒曜石
28	58	石鏃	1.60+α	1.90	0.40	1.00	表採	黒曜石
29	59	石鏃	2.80+α	1.53	0.57	2.30	P246（F4-6層）	安山岩
29	60	石鏃	2.65+α	2.38	0.70	3.70	P290（F6-6層）	黒曜石
29	61	石鏃	3.00	2.25	0.60	3.70	№27（D3-5層）	安山岩
29	62	石鏃未製品	3.15+α	2.60	0.90	7.30	下段東側5層	安山岩
29	63	削器	3.13	1.45	0.95	1.80	P374（F4-6層）	黒曜石
29	64	削器	2.00	1.95	0.62	2.10	P180（C4-5層）	黒曜石
29	65	削器	3.75	1.65	0.48	2.90	風倒木痕	黒曜石
29	66	削器	2.85	1.60	0.50	1.75	中段西側5層	黒曜石
29	67	削器	6.14+α	2.80	1.00	18.10	P83（C5-5層）	安山岩
29	68	削器	7.20	7.10	1.45	90.80	表採	安山岩
29	69	石匙	3.12	6.95+α	0.90	9.80	№42（F5-6層）	安山岩
29	70	ドリル	2.76+α	1.05	0.50	1.70	P79（D3-5層）	黒曜石
29	71	つまみ形石器	2.30	1.65	0.50	1.75	P4（D4-5層）	黒曜石
29	72	つまみ形石器	3.30	1.60	0.50	2.10	P23（D6-5層）	黒曜石
29	73	異形石器	2.61+α	0.95	0.50	1.10	表採	姫島産黒曜石
29	74	剥片	2.51	1.83	0.63	2.60	5層	黒曜石
29	75	縦長剥片	4.70	1.75	0.55	4.10	風倒木痕	黒曜石
29	76	剥片	6.35	8.50	1.40	46.00	№51（G5-6層）	安山岩
30	77	有溝石錘	3.40	2.87	2.18	26.20	№12（G4-5層）	凝灰岩
30	78	有溝石錘	3.70	3.21	2.48	37.90	№5（E5-5層）	凝灰岩
30	79	有溝石錘	3.15	3.00	2.20	27.60	下段西側6層	凝灰岩
30	80	有溝石錘	3.10	2.85	1.70	20.60	№9（C6-5層）	凝灰岩
30	81	有溝石錘	3.00	2.96	1.68	16.30	上段中央6層	凝灰岩
30	82	有溝石錘	3.78	3.04	2.30	31.50	№58（P343内、F6-6層）	凝灰岩
30	83	有溝石錘	3.70	3.46	2.18	39.00	P195（C5-6層）	凝灰岩
30	84	有溝石錘	4.10	3.50	2.40	48.10	表採	凝灰岩
30	85	有溝石錘	5.50	4.15	1.90	35.00	№11（G3-5層）	流紋岩
30	86	石錘	3.32	2.90	1.53	18.70	土坑1（G4-6層）	凝灰岩
30	87	石錘	3.53	3.45	2.10	29.20	P367（B5-6層）	凝灰岩
30	88	石錘	5.62	4.30	1.49	39.50	P77（E3-5層）	砂岩

第３表　下小野遺跡出土石器計測表②

挿図番号	遺物番号	器種	大きさ（cm）			重さ（g）	出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ			
30	89	石錘	6.40	5.90	2.50	120.00	P295（C2-6層）	凝灰岩
30	90	石弾	3.23	2.82	2.80	30.45	№7（C6-5層）	凝灰岩
31	91	十字形石器	6.0+α	7.60	0.55	25.00	土坑2最上層	片岩
31	92	十字形石器	4.30+α	10.80	1.0～0.85	51.00	№59（P307下層、F6-6層）	片岩
31	93	打製石斧	12.30	6.50	1.38	120.00	№20（E5-6層）	雲母片岩
31	94	扁平打製石斧	12.75	7.00	1.50	140.00	風倒木痕	緑泥片岩系
31	95	石鍬	15.30	9.50	1.25	235.00	風倒木痕	片岩
32	96	接合資料－石核	7.80	9.10	5.40	320.00	№41（F5-6層）	安山岩
32	97	接合資料－剥片	8.30	5.30	2.35	74.00	№41（F5-6層）	安山岩
33	98	定角式石斧	7.5+α	4.90	2.10	115.00	№1（H6-5層）	蛇紋岩
33	99	乳棒状石斧	7.5+α	5.50	3.10	200.00	№3（G4-5層）	蛇紋岩
33	100	乳棒状石斧	10.5+α	5.10	2.90	215.00	P81（E4-5層）	花崗岩質
33	101	乳棒状石斧	13.4+α	4.10	3.20	260.00	P57（F3-5層）	硬砂岩
33	102	乳棒状石斧	14.2+α	4.90	3.80	276.00	風倒木痕	蛇紋岩
33	103	乳棒状石斧	14.9+α	5.40	3.20	316.00	風倒木痕	砂岩
33	104	乳棒状石斧	20.8+α	6.80	4.30	980.00	P19（E5-5層）	蛇紋岩
34	105	凹み石	5.7+α	5.4+α	3.2+α	57.00	№21（F3-5層）	凝灰岩
34	106	凹み石	7.15	6.50	4.30	219.00	№57（F6-6層）	凝灰岩
34	107	凹み石	9.15	7.40	2.80	227.00	P160（G6-5層）	凝灰岩
34	108	凹み石	8.40	6.80	4.00	250.00	№54（C5-6層）	凝灰岩
34	109	凹み石	7.70	8.40	4.10	293.00	№4（G4-5層）	凝灰岩
34	110	凹み石	8.90	6.75	3.80	310.00	№49（E7-6層）	片岩
34	111	凹み石	10.90	7.10	3.50	323.00	№70（E4-6層）	凝灰岩
34	112	凹み石	10.5+α	7.45	4.10	510.00	№6（H6-6層）	凝灰岩
34	113	凹み石	9.60	8.60	3.90	350.00	№73（C4-6層）	凝灰岩
34	114	凹み石	12.70	8.40	2.70	353.00	№55（E7-6層）	片岩
34	115	凹み石	12.10	8.50	2.90	280.00	№8（C6-5層）	凝灰岩
34	116	凹み石	12.90	9.65	4.10	744.00	溝1	凝灰岩
34	117	凹み石	16.20	7.40	5.50	725.00	№50（E5-6層）	片岩
34	118	凹み石	20.20	9.65	6.60	1770.00	溝1	凝灰岩
35	119	磨石	8.50	4.90	4.60	263.00	№76（G6-6層）	玄武岩
35	120	磨石	9.35	8.30	4.50	465.00	№69（F4-6層）	凝灰岩
35	121	磨石	9.35	6.95+α	3.70	255.00	№17（O5-5層）	凝灰岩
35	122	磨石	8.95	7.80	6.50	605.00	№66（F5-6層）	凝灰岩
35	123	磨石	8.90	8.80	4.70	470.00	№61（D5-6層）	凝灰岩
35	124	磨石	9.75	9.05	5.55	640.00	№71（E4-6層）	凝灰岩
35	125	磨石	10.40	8.80	2.80	330.00	№52（B4-6層）	凝灰岩
35	126	磨石	11.60	7.0+α	4.40	605.00	№74（C4-6層）	凝灰岩
35	127	磨石	11.2+α	8.3+α	3.90	595.00	P45（G4-5層）	砂岩
35	128	磨石	10.5+α	10.20	5.35	819.00	№75（C3-6層）	凝灰岩
35	129	磨石	12.70	9.50	5.70	975.00	№65（C5-6層）	凝灰岩
35	130	磨石	12.70	9.10	5.20	1000.00	土坑2　№3	凝灰岩

第３表　下小野遺跡出土石器計測表③

包含層第６層からはほとんど土器が出土していないため、はっきりした時期は特定できない。しかし、６層出土の石器の中にはかなり風化が進んでいるものが散見され、村内で確認された縄文時代遺跡には一木遺跡など早期の遺跡があることから、土器は伴わないが早期の石器群があった可能性を指摘しておきたい。

最後に、炭化種実に触れておきたい。本遺跡で検出したピットのうち、炭化種実が出土したピットが全部で10基ある。炭化種実が出土したピットは調査区内の中央やや北寄りに集中している。４号土坑からも出土している。特筆すべきは284号ピットで、径30cm、深さ７cmの小さなピット中から、破片を含め53点の炭化種実が出土している。土器等の遺物は全く含まれていなかった。

星野村下小野遺跡出土の種実

株式会社古環境研究所

1．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、星野村下小野遺跡で出土した炭化種実の同定を行い、当時の周辺植生ならびに食料について検討を行った。

2．試料

試料は、選別済みの炭化種実15点である。

3．方法

同定は、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種などの階級で示した。

4．結果

（1）分類群

樹木２分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。なお、写真を示した分類群については大きさを記載する。

〔樹木〕

イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　子葉（完形・半形・破片）ブナ科

炭化しており黒色で、楕円形を呈する。表面は滑らかで、縦方向に一条の凹線が入る。長さ11.83 ㎜×幅10.18 ㎜（写真１）、長さ13.71 ㎜×幅9.18 ㎜（写真２）、長さ11.92 ㎜×幅8.98 ㎜（写真３）、長さ13.29 ㎜×幅8.67 ㎜（写真４）、長さ14.12 ㎜×幅9.82 ㎜（写真５）、長さ11.20 ㎜×幅9.83 ㎜（写真６）。

コナラ属　*Quercus*　子葉（破片）　ブナ科

この分類群は破片であり、表面模様が観察出来ないため属レベルの同定までである。

不明炭化物

炭化の度合いが著しく、破片であるため形態は不明。表面模様が観察出来ないことから不明炭化物とする。

5．所見

星野村下小野遺跡より出土した種実類について同定を行った結果、イチイガシ、コナラ属が同定された。コナラ属としたものは破片のため、種レベルまでの同定ができなかった。おそらく本遺跡

の出土種実はすべてイチイガシとみられる。イチイガシは、西南日本の照葉樹林を構成する主要高木で、自然度の高い原生林種である。西南日本の縄文遺跡では普通に検出され、弥生時代の例は激減する。イチイガシの果実は、カシ類およびナラ類の中で唯一渋抜き（灰汁抜き）なしに食べられる種類である。遺跡の周囲にはイチイガシなどの照葉樹林が分布していたと考えられ、果実が食用として利用されていたと考えられる。

参考文献

南木睦彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食. 雄山閣、187p.

表１　星野村下小野遺跡における種実同定結果

分類群 学名	分類群 和名	部位	P12	P146	P231	P284	P303	P345	P351	P352	P355	P539	炭化物①（5層）	炭化物①付近5層	炭化物②（5層）	下段6層ミゾ1付近	土坑4
Arbor	樹木																
Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉（完形）		1		16			1			2	3			3	
		（半形）	1			7			4			2		1		3	5
		（破片）	1			30			1			2				3	
Quercus	コナラ属	子葉（破片）					4	3		9	2	10			4		
Total	合計		2	1	0	53	4	3	6	9	2	16	3	1	4	9	5
Unknown plants	不明炭化物				1			3			1						
備考	炭化材片					2	3	4			2						
	土塊					4											

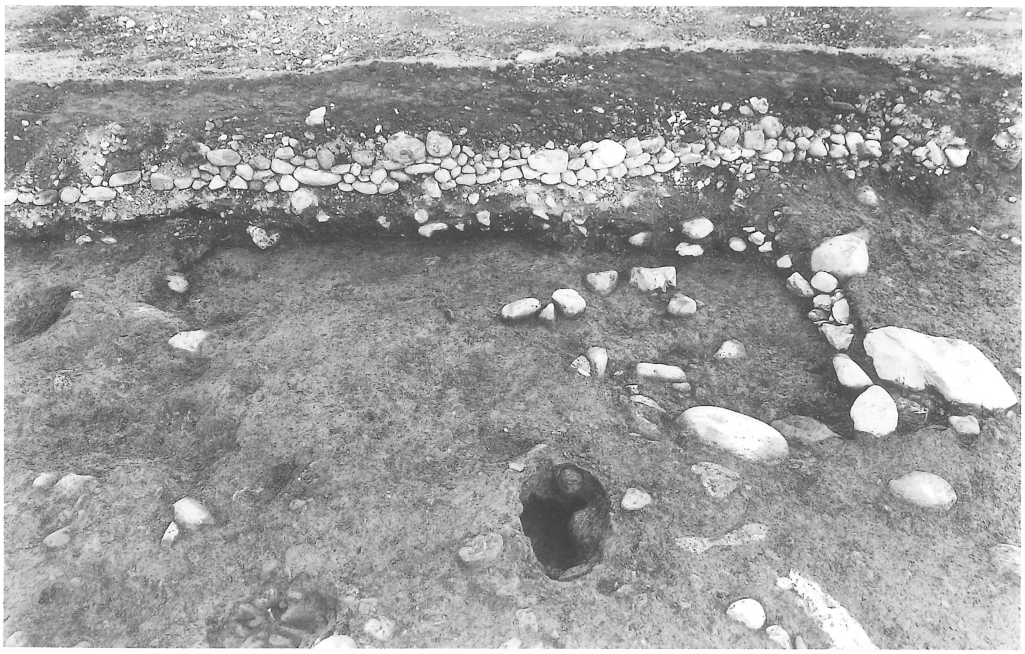
図　　版

1　寄遺跡遠景（空中写真　上が北東）

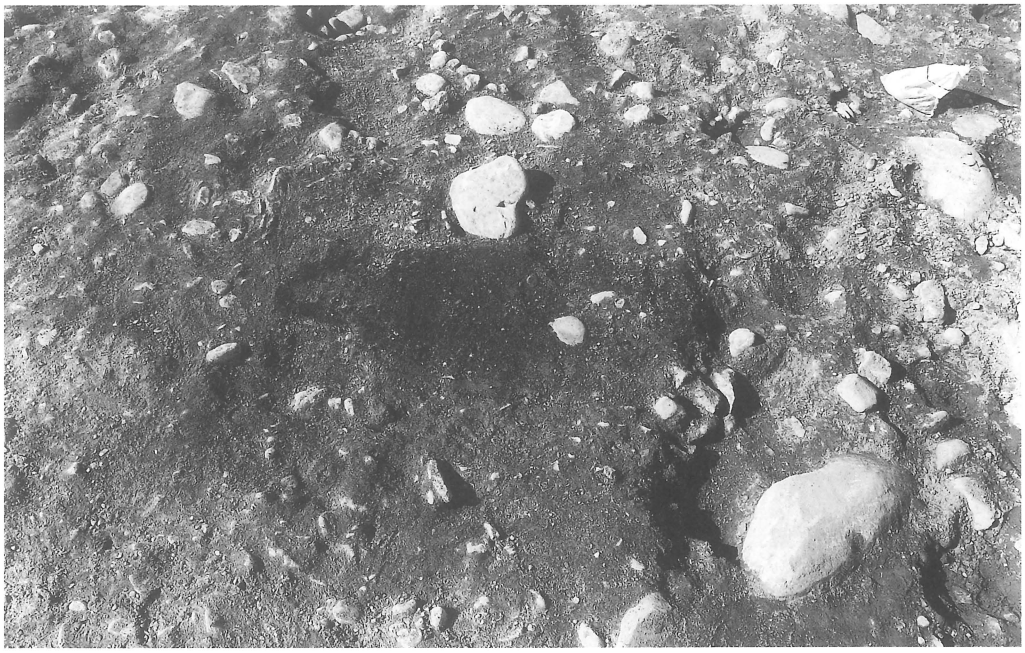
2　寄遺跡全景（空中写真　上が北）

1　寄遺跡　1号掘立柱建物跡
（北から）

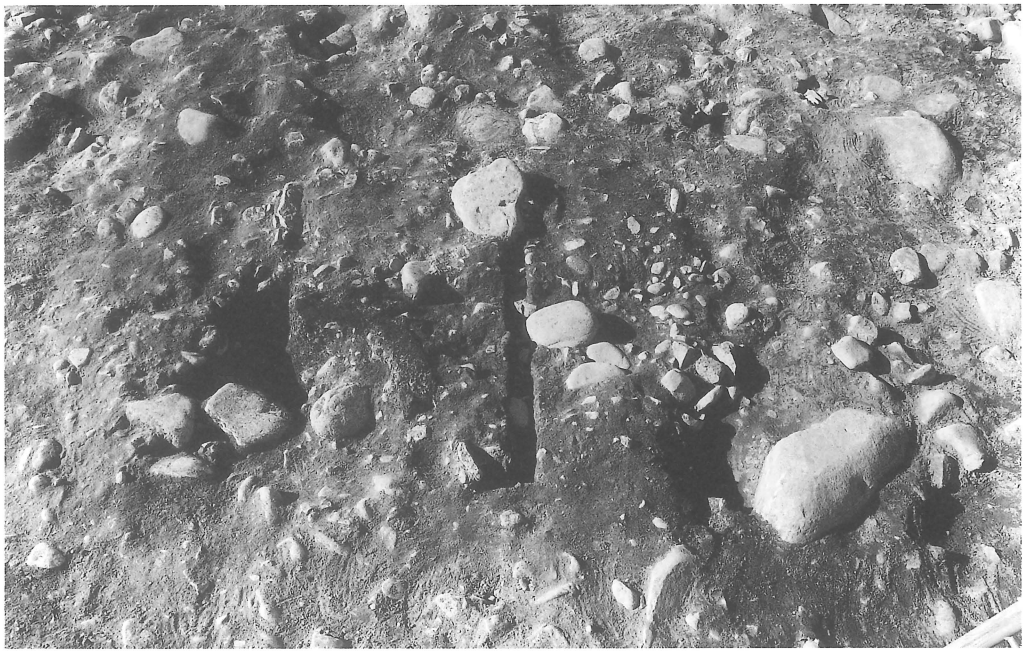
2　寄遺跡　2号掘立柱建物跡
（南から）



3　寄遺跡　1号土坑
（南から）



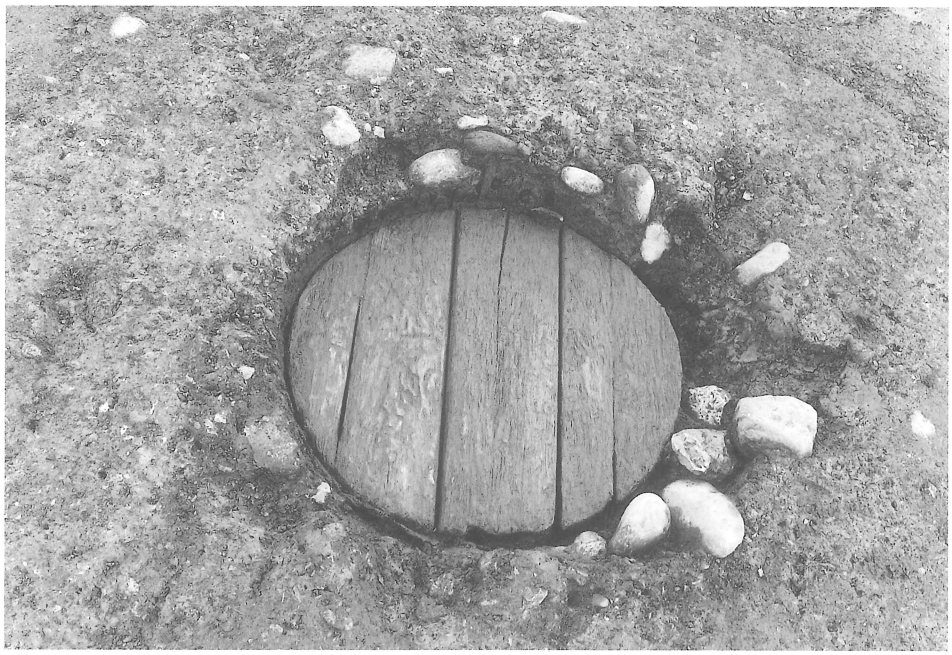
1　寄遺跡　２号土坑検出状況
（南東から）



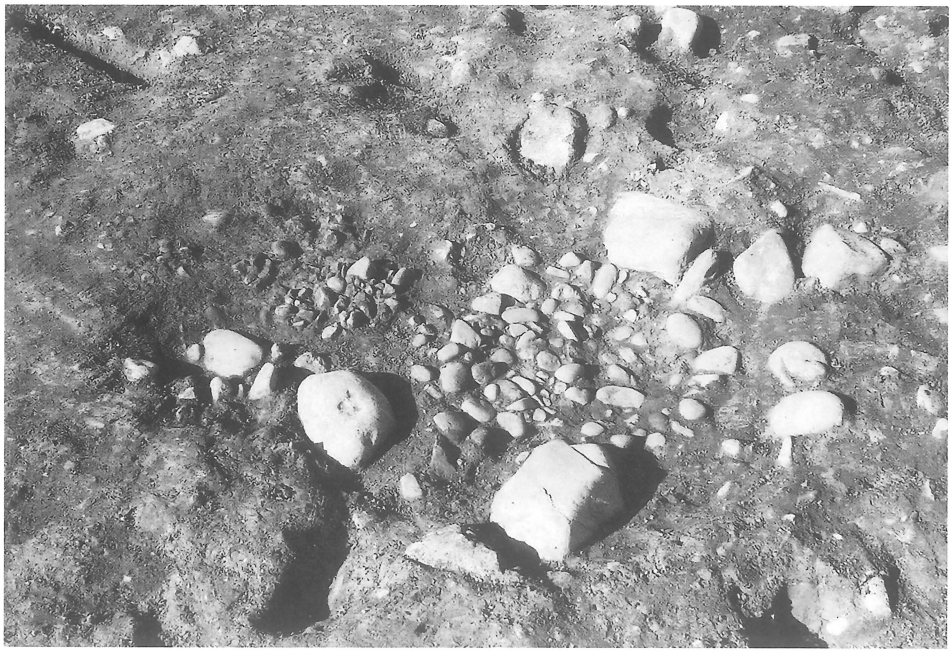
2　寄遺跡　２号土坑完掘状況
（南東から）

3　寄遺跡　１号井戸
（東から）

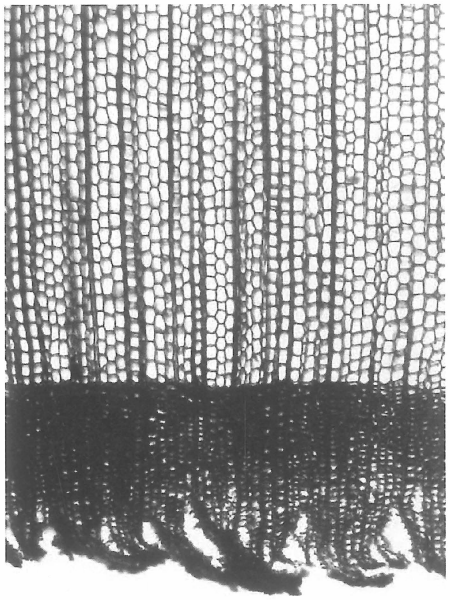
1　寄遺跡　２号井戸
（東から）



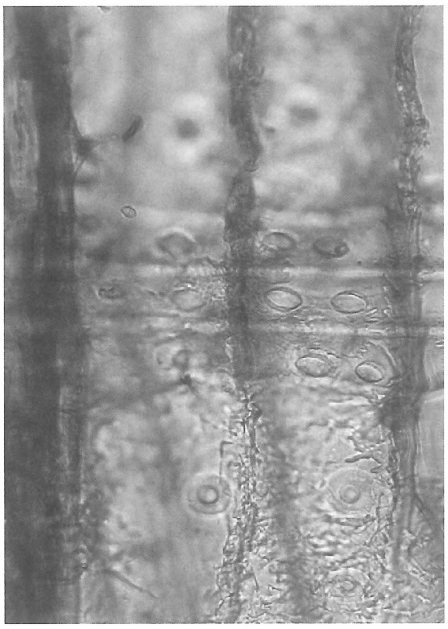
2　寄遺跡　不明遺構
（西から）



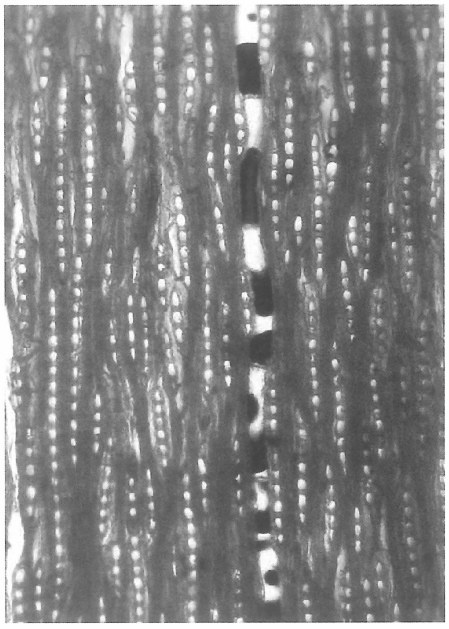
3　寄遺跡　ピット16
（南から）



横断面 ―――― : 0.5mm
スギ



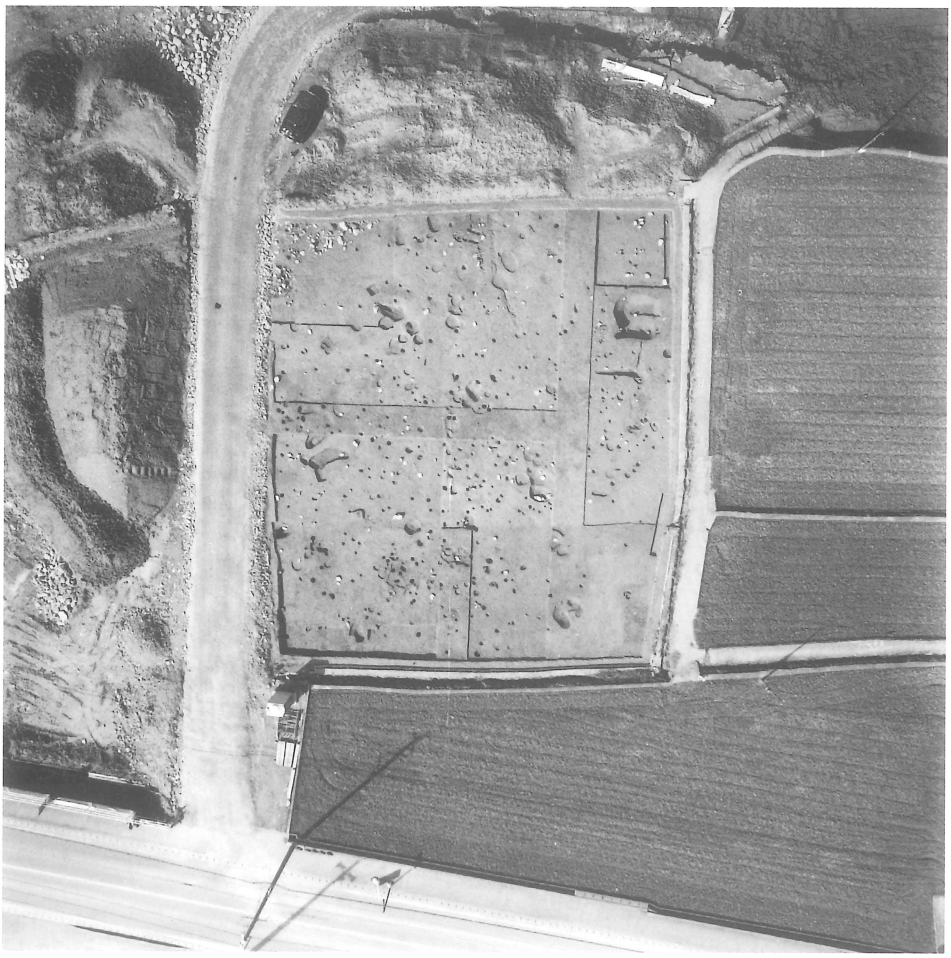
放射断面 ―――― : 0.05mm



接線断面 ―――― : 0.2mm

寄遺跡　出土遺物

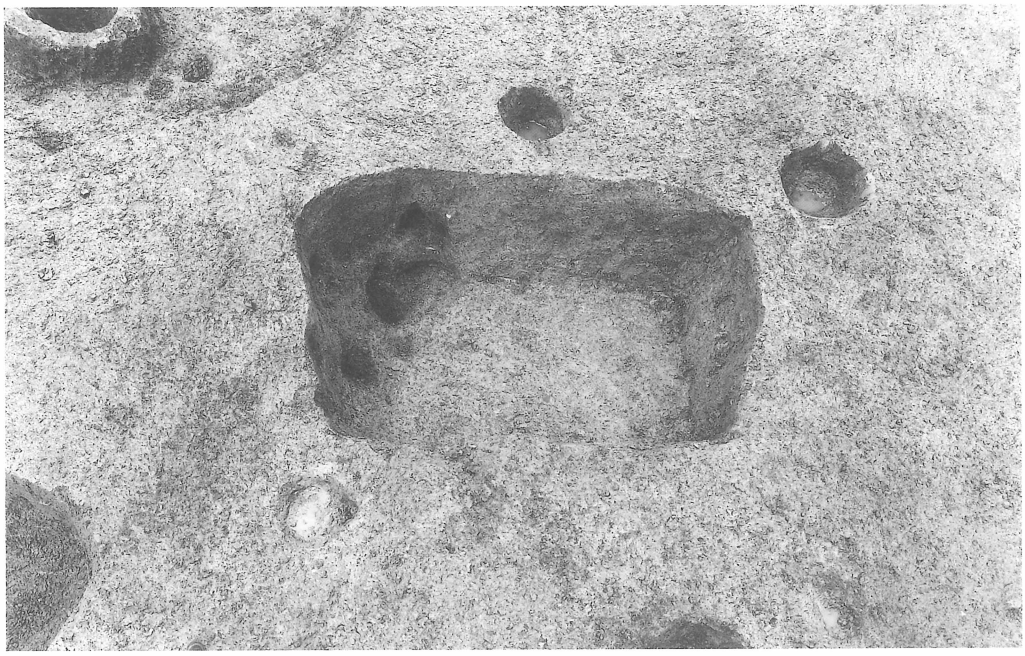
1　下小野遺跡遠景
（空中写真　上が西）



2　下小野遺跡包含層完掘状況
（空中写真　上が北）

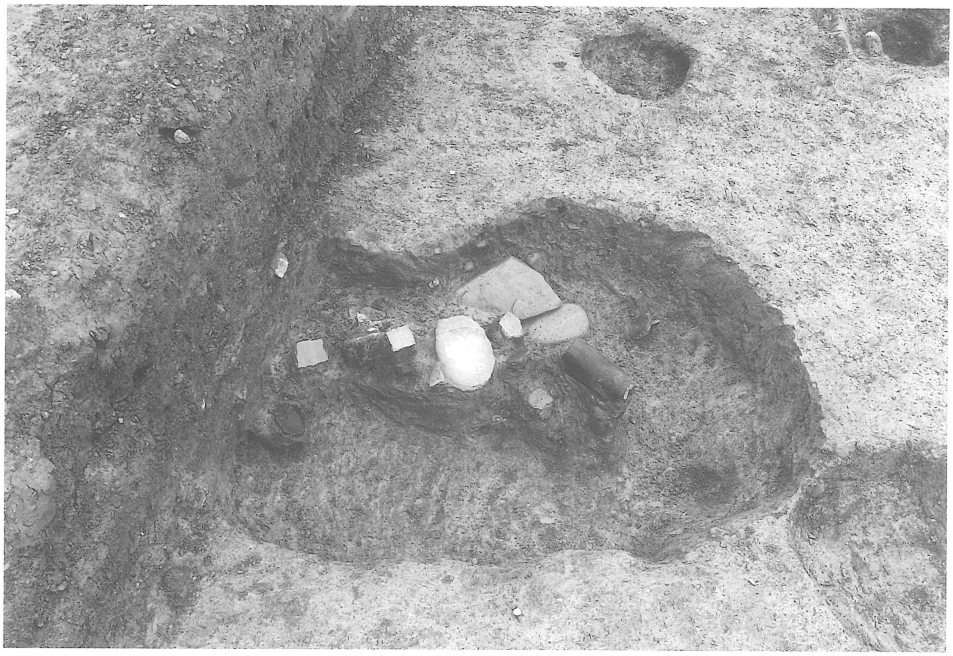
1　下小野遺跡上層完掘状況
（南から）

2　下小野遺跡下層完掘状況
（西から）



3　下小野遺跡　1号土坑
（南から）

1　下小野遺跡　２号土坑
（南から）



2　下小野遺跡　３号土坑
（南西から）

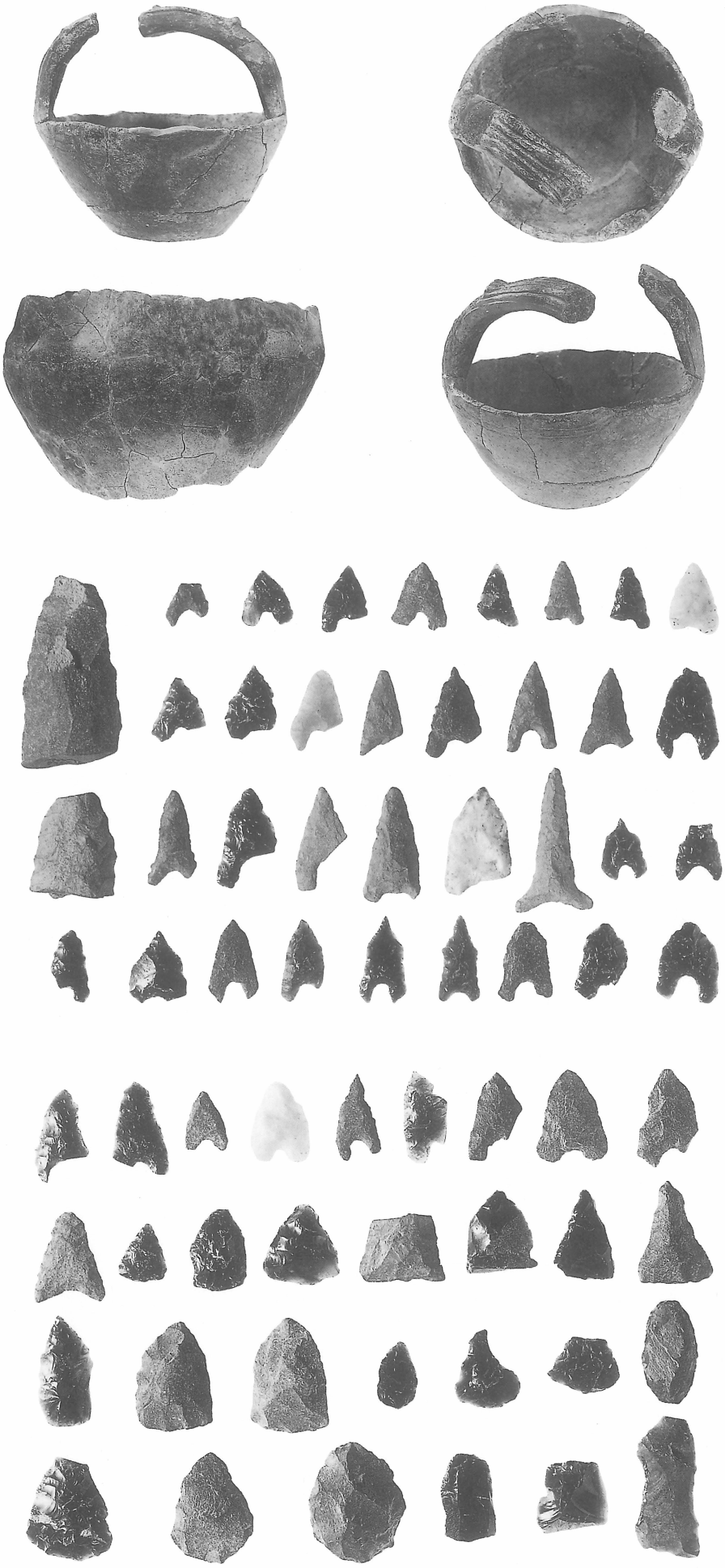
3　下小野遺跡　４号土坑
（東から）

1　下小野遺跡　埋甕
（北東から）

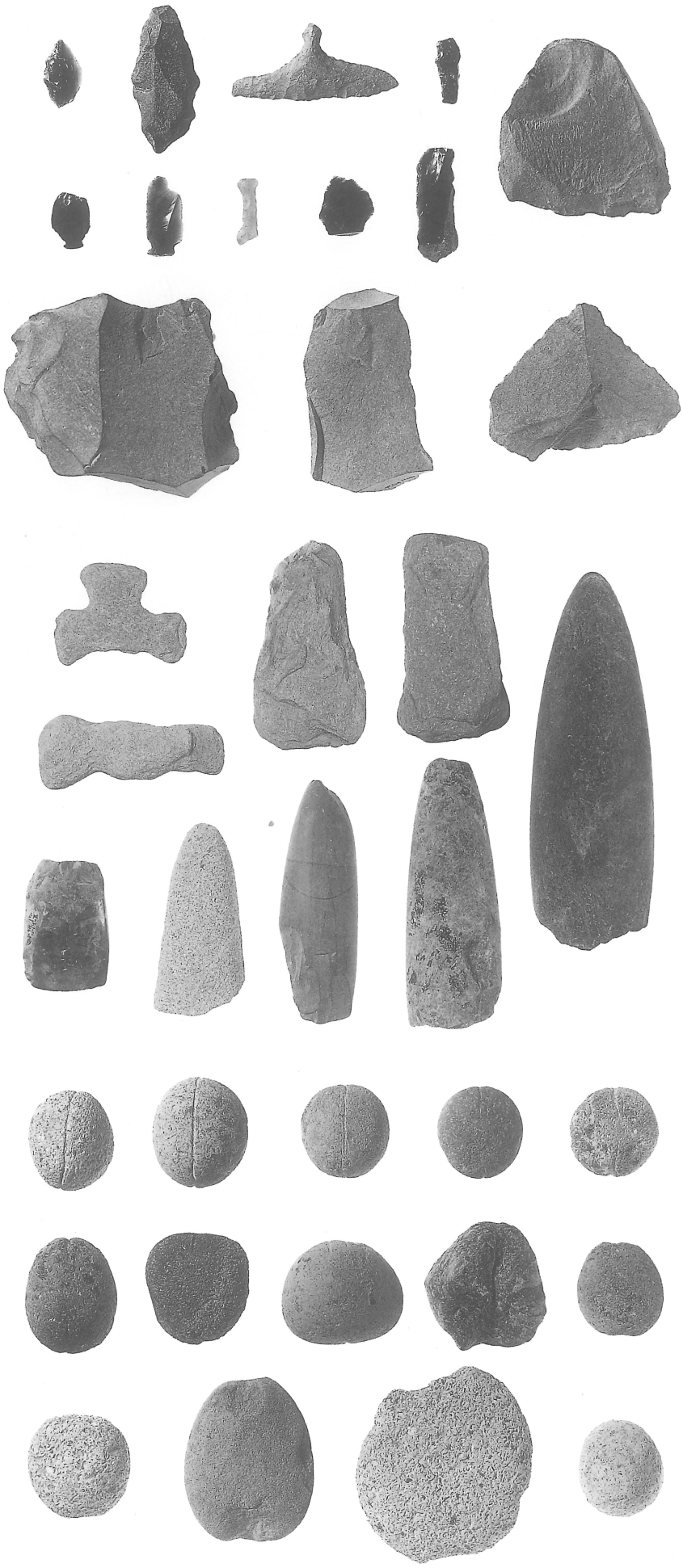
2　下小野遺跡　不明遺構
（南東から）

3　下小野遺跡　石核・剥片
出土状況（西から）

下小野遺跡　出土遺物①



下小野遺跡　出土遺物②



下小野遺跡　出土土遺物③

下小野遺跡　出土遺物④

1　イチイガシ子葉

2　イチイガシ子葉

3　イチイガシ子葉

4　イチイガシ子葉

— 1.0 mm

5　イチイガシ子葉

6　イチイガシ子葉

7　イチイガシ子葉

— 1.0mm

— 5.0 mm

下小野遺跡　出土炭化種実

報告書抄録

ふりがな	よりいせき・しもおのいせき
書　　名	寄遺跡・下小野遺跡
副　書　名	福岡県八女郡星野村所在遺跡の発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	星野村文化財調査報告書
シリーズ番号	第３集
編著者名	木下修・今井涼子
編集機関	星野村教育委員会
所　在　地	
発行年月日	西暦2009年12月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寄遺跡（よりいせき）	八女郡星野村（やめぐんほしのむら） 大字寄（おおあざより）			33° 15′ 06″	130° 44′ 39″	2008.11.26 ～ 2009.1.9	1732.5	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
下小野遺跡（しもおのいせき）	八女郡星野村（やめぐんほしのむら） 大字下小野（おおあざしもおの）			33° 14′ 57″	130° 42′ 21″	2008.12.25 ～ 2009.2.19	810	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寄遺跡	集落	平安、中世	掘立柱建物、溝 土坑、井戸跡 不明遺構 ピット	土師器、須恵器 黒色土器、磁器 瓦、土製品	
下小野遺跡	集落	縄文時代晩期	溝、土坑 埋甕、不明遺構 風倒木痕 ピット	縄文土器 土師器、磁器 土製品、石器	

寄遺跡・下小野遺跡

星野村文化財調査報告書

第３集

2009（平成21）年12月28日

発行　星野村教育委員会

福岡県八女郡星野村13102-1

印刷　大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20